

市民科学通信

2023 年 1 月号

(通算 32 号)

2023 年 1 月 28 日 発行

発行: *NGO* 市民
科学京都研究所

〒616-8012 京都市右京区谷口
垣ノ内町 5-8

嵐電・龍安寺駅北東へ徒歩 3 分

事務局 E-mail :

sigemo.nao@gmail.com

目 次

原発回帰政策の基本的問題	青水 司	02
【コラム】「あくまで戦争を非認す」とは、ということなのか		
—「連邦共和制・永世中立国」に向けて—	重本 冬水	05
【コラム】吹雪のなかで——「新しい資本主義」論は		
何を意味するのだろうか	中村 共一	10
同僚性の欠乏	塩小路橋宅三	13
将来人材に希望を託す		
—キャリアアドバイザー体験記・秋から冬へ—	真島 正臣	15
篠原三郎と柄谷行人 (3-終)		
—史的唯物論への疑問と未来への展望—	宮崎 昭	21
交換様式「D」の飛来 (後編)		
—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—	香椎 五郎	26
【近況短信】ファンタジーにある「老い」		
—団地タクシー奮闘記 (「呪文の人」の巻) ④—	宮崎 昭	33
「見えざる手」から「見える手」へ	竹内 真澄	35
【エッセイ】女子長距離走者の夢	照井日出喜	36

原発回帰政策の基本的問題

青水 司

まえがき

2020 年岸田首相は総裁選挙にあたって、将来的には「再生可能エネルギーを主力電源化し、原発への依存度は下げていくべきだ」、とくに再生エネルギーを重視して「環境問題のリーダー国に」すると主張していました（岸田文雄『岸田ビジョン』講談社、2020 年）。ところが、2022 年 7 月の参議院選公約では、「安全が確認された原子力の最大限の活用を図る」と後退し、次世代革新炉を含む GX 戦略はさらなる後退です。福島第 1 原発過酷事故以降、歴代首相は少なくとも原発への依存度の低減を掲げており、新增設や建て替えの検討を明言したのは岸田首相が初めてです。しかし安倍晋三元首相はすでに政権交代直後の 2012 年 12 月 30 日に報道番組で原発の新增設を認める発言をしています。

原子力政策の転換が 2022 年 8 月 24 日、「第 2 回 GX（グリーン・トランスフォーメーション）実行会議」で岸田首相から示されました（16 号参照）。その後判明したことも踏まえて、整理したいと思います。

はじめに

GX とは「産業革命以来の化石燃料中心の経済・社会、産業構造をクリーンエネルギー中心に移行」させる「経済社会システム全体の変革」で、その中核に原子力をすえるというのが経産省の規定です。

官僚文書とはいえ、あまりに歴史に逆行する文言です。「原子力」を地域分散型「再生可能エネルギー」に置き換えれば理解できますが、産業構造としても大量生産・大量消費・大量廃棄からの脱却が求められている現代、なぜ原発なのでしょう。原発は 1 基 100 万キロワット級が標準で、建設費が 1 兆円規模の重厚長大産業の代表です。おまけに大量の放射性廃棄物を子孫に残します。

1. 次世代革新炉の新增設（表 1 参照）

・革新軽水炉：若干機能が追加されており、経産省は国内では「革新」と称していますが、国際的には現行第 3 世代に区分され「次世代」や「革新」とは言えないものです。福島第 1 原発過酷事故（以下、3.11 と略す）の時も、西欧の最新型の原発ではすでにメルトダウンに対応する「コアキャッチャー」などを設置していましたが、日本は設置していないのに日本の原子力技術は最高だと述べ批判されていました。

・その他の革新炉は国内で導入のめどが立っていません。

高速炉は、見通しが無いのに原爆の優秀な材料プルトニウムを手にするということで再度の開発に取り組もうとしていると思われます（16 号参照）。

表 1 次世代革新炉の概要と経済産業省の導入見込み

炉型	内容	建設開始	運転開始
革新軽水炉	新しい技術を導入した大型軽水炉	2030 年代前半	2030 年代半ば
小型軽水炉	電気出力 30 万キロワット以下の原子炉	2030 年代半ば	2040 年代前半
高速炉	高速中性子を利用する原子炉	2040 年	2040 年代
高温ガス炉	冷却材にヘリウムガスを用いた原子炉	2030 年	2030 年代半ば
核融合炉	核融合反応を用いた原子炉	2030 年代半ば	未定

2. 原発回帰政策

①3.11 以降のエネルギー基本計画など

民主党「革新的エネルギー・環境戦略」（2012 年）：原発に依存しない社会の実現（2030 年代の原発ゼロ）

第 4 次エネルギー基本計画（2014 年 4 月）：「原発依存度は可能な限り低減」

長期エネルギー需給見通し（2015 年閣議決定）：2030 年の原発の電源割合：20~22%

第 5 次エネルギー基本計画（2018 年 7 月）：高温ガス炉、熔融塩炉、小型モジュール炉（カートリッジ式原子炉）

第 6 次エネルギー基本計画（2021 年 10 月）（表 2 参照）

表 2 電源構成予測

	再エネ	原子力	LNG	CCUS	石炭	石油	水素・アンモニア
2019	18	6	37	0	32	7	0
2030	36~38	20~22	20	0	19	2	1
2050	50~60	20~30	0	10	0	0	10

注) 1. CCUS : CO₂回収・有効利用・貯留付き火力

2. 2019 年は実績（1.02 兆 kWh）

2030 年は第 6 次エネルギー基本計画想定（2021.10）（0.93 兆 kWh）

2050 年は経産省想定（1.3~1.5 兆 kWh）

②原発回帰政策は、突然ではなく第 4 次エネルギー基本計画（2014 年）以降、第 5 次エネルギー計画（2018 年）の間に進められてきたと思われます。

その契機は、1) 電力会社（とくに再稼動できない東電）はもちろん、輸出に失敗している原子力メーカー（とくに東芝の破たん）を援助する。そのため、3.11 で後退していた原子力ムラが放射線被害（小児甲状腺がん）を否定する（安全より不安をなくす）、福島帰還政策一辺倒など総じて福島安全論、そして原発安全論が強力に推進されています。2) 小型モジュール炉や次世代革新炉を目玉に、とりあえず原発の維持を図る。3) 2050 年には 3 割以上電力需要を増やし、原発拡大を図ります。

3. リニア中央新幹線問題

橋山禮次郎氏は全線の9割がトンネルで、南アルプスの深部最大1400mに20kmの長大トンネルを掘り、時速500kmの超高速鉄道をとおすことが可能かという以上に「もの言わぬ自然に対する人間のこれほど強烈な暴挙が、そもそも許されるのか」『リニア新幹線 巨大プロジェクトの「真実」』（集英社新書、2014年）と語っています。数々の自然環境破壊から農工業用水・生活用水（大井川など）までが問題になっています。すでに陥没被害も出ています。原発にあまり関係ないと思っていた「リニア新幹線」の消費電力は、従来の「新幹線のぞみ」の4~5倍という。東京ー大阪間では74万キロワット、原発1基分必要です。リニア計画を検証していた国交省の「中央新幹線小委員会」は3.11直後の5月にGOサインを出しています。また、葛西敬之 JR 東海社長は「原子力を利用する以上、リスクを承知の上で、それを克服・制御する国民的な覚悟が必要である」（『産経新聞』2011年5月24日付）と語っています。政府・通産省（現経産省）はバブル崩壊後の1990年代以降も原発拡大を企図しそれに見合う電力需要を掘り起こしてきました。そして、東電・柏崎刈羽原発とJR東海を結びつけ、3.11後も原子力ムラは反省もせず、責任も取らないどころか、葛西敬之氏のように国民を脅し東電を激励しているのです。その政策の中心は、相変わらず原子力産業、建設産業、鉄鋼産業、鉄道産業、高速道路といった重厚長大産業優先と自然破壊です。

山本義隆『リニア中央新幹線をめぐってー原発事故とコロナ・パンデミックから見直すー』みすず書房、2021年参照

追記：第17号（前号）で伊方原発について紹介しましたが、その対岸（山口県上関町祝島）で中国電力が、瀬戸内海の本来の生物相（生物多様性）と漁業が奇跡的によく残っている「宝庫」を埋め立て新たな原発を建設しようとしています。生物学の研究者組織（日本生態学会、日本ベントス学会、日本鳥学会）が中国電力や監督官庁に環境影響評価を求める要望書を提出してきましたが、無視され続けています（2000年から2011年までに13件）。

3.11で建設は中断されていますが、中国電力は断念していません。リニアと同様許されないことです。

山秋真『原発をつくらせない人々ー祝島から未来へ』岩波新書、2012年他参照

おわりに

産業構造を転換することなく、岸田政権は軍事力を増やすことに没頭し、財政赤字の増加のためインフラの老朽化、自然の破壊・荒廃がますます進み、再生可能エネルギーの拡大はどうなるのでしょうか。メガソーラが増えても地域分散ネットワーク化による地域の活性化は進みません。国民とくに貧困所帯、障害者などの弱者は増税に苦しめられます。それだけでなく軍隊（自衛隊）、原発の情報は機密にされる一方市民のプライバシーは侵害、管理化されます。情報ネットワークは「便利」ですが、エドワード・スノーデンが明らかにした情報収集と監視の怖さは、戦争、核反対をはじめとする市民の運動を掘り崩します。戦前も弾圧はひどかったが、ネットワークの怖さも深刻です。情報が収集できない市民に国民主権、民主主義はありません。

（あおみ つかさ）

【コラム】

「あくまで戦争を非認す」とは、 ということなのか —「連邦共和制・永世中立国」に向けて—

重本冬水

(1)

今年の年賀状はいつもと違い字数が多くなりました。次のように書きました。

+++++

新年を迎えましたが、集団的自衛権、敵基地攻撃能力、核共有、防衛費2倍化など、戦争準備が進んでいます。次の言葉が頭と心から離れません。日露開戦前夜の秋水の言、国際連盟、国際連合創設の基礎となったカントの言です。

《幸徳秋水の言》

吾人は飽くまで戦争を非認す
之を道徳に見て恐る可きの罪惡也
之を政治に見て恐る可きの害毒也
之を經濟に見て恐る可きの損失也
社會の正義は之が爲めに破壊され
萬民の利福は之が爲めに蹂躪せらる
吾人は飽くまで戦争を非認し
之が防止を絶叫せざる可らず

「平民新聞」第10号、1904年1月17日

《イマヌエル・カントの言》

「一緒に生活する人間の間の平和状態は、なんら自然状態 (status naturalis) ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。言いかえれば、それはたとえ敵対行為がつねに生じている状態ではないにしても、敵対行為によってたえず脅かされている状態である。それゆえ、平和状態は、創設されなければならない」 (宇都宮芳明訳『永遠平和のために』岩波文庫、27ページ)。

+++++

私はこの二人の言の意味を、今、ここ (「市民科学通信」1月号) で述べなければと思います。秋水の「飽くまで戦争を非認す」とは、カントの「平和状態の創設」とは、その関連とは、どういうことなのか。

(2)

ロシアのウクライナ侵攻（侵略）によって戦争を生じさせたロシアの侵略行為そのものは全面的に非難される行為です。「戦争を非認す」の立場から言えば「絶対悪」（どのような思想・立場・観点からみても悪）です。他方、侵攻（侵略）されたウクライナが反撃することを、この「戦争を非認す」の立場からどう考えたらよいのでしょうか。「反撃」であれば戦争を容認することになるのでしょうか。否です。「あくまで戦争を非認す」なのです。

カントの言う「戦争状態」とは「たとえ敵対行為がつねに生じている状態ではないにしても、敵対行為によってたえず脅かされている状態である」とすれば、ロシア侵攻（侵略）以前からロシアとウクライナの間（特にクリミア半島、ウクライナ東部地域など）には「敵対行為によってたえず脅かされている状態」と言える事態が続いていました。また、ロシアとNATOの関係（脅かされている状態）も含めてです。この事態から2022年2月24日のロシア侵攻（侵略）へと続いています。

また、アメリカは、ロシアの侵攻（侵略）を批判していますが、これまで朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争、アフガニスタン戦争などでの侵攻を繰り返してきました。そして日本はこのアメリカに協力あるいは加担してきました。それは日本が「戦争状態」の中にあったことを意味しています。戦後日本は、「戦争状態」とは無関係な「平和状態」にあったのではなく、「戦争状態」の中の「平和状態」にあったのです。

なによりも日本は、明治以降、朝鮮半島への侵攻（侵略）、中国本土から、ソ連を含むアジア諸国、太平洋諸島の国々へと侵攻（侵略）した「絶対悪」の事態を生じさせました。そして今、その反省の歴史が忘却され、自民党政権は戦争準備（軍備増強だけでなく、教育、研究、文化、軍需産業、宇宙開発、公報・プロパガンダなども含め）を全面的・総合的に進めようとしています。明治以降から現在まで日本は変わっていない。

（3）

ウクライナのゼレンスキー政権は、18歳から60歳の男性を軍隊に召集しています。良心的を含め兵役拒否を認めていません。兵役拒否は「非国民」です。また、ゼレンスキー政権はアメリカをはじめNATO加盟諸国などに武器の一層の供与を強く求めています。中でもアメリカの武器供与はけた外れの大規模なものです。その背後にアメリカの軍需産業、産軍複合体と巨大資本が存在します。2021年度の軍事費は、ウクライナが約59億ドル、ロシアが約660億ドルです。10倍以上の開きがあります。アメリカは約8000億ドル、日本は約540億ドルです。ウクライナの軍事費はアメリカの100分の1以下です。この軍事超大国アメリカはウクライナへの武器供与を増大させ続けています。昨年2月のロシアの侵攻以降のアメリカからのウクライナへの軍事支援は約190億ドル（ウクライナの軍事費の3倍以上）となっています。これは代理戦争です。戦争、「戦争状態」は終わりません。

このような事態の中、日本の防衛費を2倍化すること、敵基地への攻撃（反撃）能力（ミサイルなど）を保持することを自民党政権は昨年12月に閣議決定しました。2倍化すれば軍事費は、アメリカ、中国に次ぐ第3位になります。当然、中国と日本の間は互いに軍事的脅威（「敵対行為によってたえず脅かされている状態」）が高まる事態になります。たとえ「抑止力」と言ったところで相手側からみれば軍事的脅威になります。当然、軍拡競争になります。次は軍事費3倍化です。否、戦前のようになるでしょう。そうなれば、「戦争反対!」、「軍備増強反対!」は、非国民です。私は市民です。地域の民であり、東アジアの民でもあります。

（4）

「あくまで戦争を非認す」の立場は憲法9条の立場です。国家および政権の枠内（その立場）ではなく、憲法9条の立場は市民のアソシエーションの立場です。それは如何なる事態においても市民は「あくまで戦争を非認す」なのです。秋水が生きていれば「吾人は飽くまで核兵器を非

認す」を付け加えるでしょう。

今、「核兵器の使用」といった言が交わされ、日本でも「核抑止力」、「核の傘」、「核共有」の言が平然と語られています。カントが言うように、国際法が「戦争への権利を正当化する法」を含むならば、「このような意図をもったひとびとは、たがいに殺戮しあい、そこで暴力行為のあらゆる残忍非道をその行為者ともども埋め尽す広大な墓地のなかで永遠平和を見出すが、かれらにとってはそれがまったく当然な成り行きである」（同上 46～47 ページ）という事態が現実味をおびてきています。世界が核兵器によって「広大な墓地」になる「永遠平和」です。

「戦争への権利を正当化する法」へと、戦後日本は「自衛隊」の創設（「戦争状態」の創設）以来、日米安保条約の度重なる改悪（日米同盟の深化・拡大）を通して「着実」に歩んできました。沖縄はその象徴です。辺野古の新基地建設はその帰結、一層の再編強化です。これは憲法 9 条の空洞化の歴史であり全否定への歴史です。

「このような（戦争への権利を正当化する）意図をもったひとびと」が増えてきています。カントの言うように、かれらは「広大な墓地のなかで永遠平和を見出す」ことになるのでしょうか、「それがまったく当然な成り行き」となるのでしょうか。そのような「現在」に私は立たされています。カントの言う「平和状態の創設」にとって、秋水の「飽くまで戦争を非認す」の言は大前提です。

(5)

かつての「ハンガリー動乱」（1956 年）において、ソ連（ソ連軍を主力とするワルシャワ条約機構軍）が軍事侵攻し、多くの民衆が犠牲者・亡命者（避難民）となりました。その後の「チェコスロバキア事件（プラハの春）」（1968 年）においても同様にソ連が侵攻しました。当時、ハンガリーもチェコスロバキアもワルシャワ条約機構内の国々です。その枠内でのソ連を中心とした社会主義体制の危機への対応としての侵攻でした。それは「動乱」であり「事件」でした。いずれの場合も国家間の戦争という事態にまで至っていません。しかし戦争を回避したということでもありません。

今回のロシアのウクライナ侵攻はこれと異なります。ウクライナは、軍事同盟「北大西洋条約機構」（NATO）とロシアを中心とした軍事同盟「集団安全保障条約機構」（CSTO）の「狭間」にありました。前述したように、今回のロシア侵攻以前からロシアとウクライナの間では、特にクリミア半島、ウクライナ東部地域などにおいて「敵対行為によってたえず脅かされている状態」が続いていました。さらに、ウクライナはロシアと一線を画した「民主主義と経済発展のための機構 GUAM」（ジョージア、ウクライナ、アゼルバイジャン、モルドバ 4 ヶ国）の中心国です。こうした中、ウクライナへの侵攻は侵略となり国家間の戦争に至ったのです。

昨年 9 月 30 日、ウクライナのゼレンスキー大統領は、「狭間」状態から「中立」へではなく、NATO への加盟申請を表明しました。

(6)

他方、この戦争から日本の現政権は一気に戦争への準備状態に入ろうとしています。驚くべきことに日本の現政権は東アジアにおけるアメリカの軍事行動と「軌を一にする」（立場や方向を同じくする）と表明しました。すでに「核抑止力」、「核の傘」、「核共有」（原発も含め）も「軌を一にする」となっています。今、東アジアにおいて戦争への準備がされつつある中で、「平和状態」はどのように創生されるべきなのか。喫緊の課題です。これは今年の私の第一課題です。

この「平和状態」の創生（「あくまで戦争を非認す」）のために「連邦共和制・永世中立国」への運動を進めたい。「連邦共和制」とは基礎自治体およびさらに小さなコミュニティ（アソシエーション）の主権をベースに連合した共和国であり、「永世中立」とは「永久に他国間の戦争

に関係しない義務を負うとともに、その独立と領土の保全を各国から永久に保障されている状態」です。憲法9条の下、このような「平和状態」を日本で創生する運動が必要です。

カントが言う「この共和国がほかの諸国家に対して連合的結合のかなめの役」を果たし、「その結果諸国家はこの結合に加盟し、こうして諸国家の自由な状態は国際法の理念に即して保障され、連合はこの種の多くの結合を通じて次第に遠くにまで拡がっていく」（同上45ページ）、これ以外に「あくまで戦争を非認す」を実現する道はないと思います。この「連合的結合のかなめの役」は、アメリカ、中国、ロシアなどの「大国」ではなく、「連邦共和制・永世中立国」でなければならない。「連邦共和制」の視点から「永世中立国」を考えてみたいと思います。

（しげもと とうすい）

付記：「永世中立」の解説文

（「世界史の窓」、https://www.y-history.net/appendix/wh1201-015_1.html より以下引用＜2023年1月22日アクセス＞、なお下線は冬水）

「国際的に他国との関係を持たない国際法上の状態。スイス・ベルギー・オーストリアなど。1983年には中米のコスタリカが永世中立を宣言した。

永世中立とは国際法上の概念で、通常的外交上の中立政策とは意味が違う。永世中立とは、他国との条約によって、他国に対して武力を行使せず、また他国間の戦争にも参加せず、武力行使を義務とする同盟などは締結しないこと（局外中立）を誓約することである。永世中立国は、やむを得ない自衛の場合を除いて武力を行使しないことを誓約し、条約締結国はその独立と中立を承認し、保障する。

永世中立を宣言した国々

このような永世中立国の最も典型的な例が、ウィーン議定書でのスイスである。それ以外にも、1839年のベルギーの中立化、第二次世界大戦後の1955年のオーストリア（オーストリア国家条約）などがある。

スイスとベルギーは、ともに国内では多言語国家であり、特にベルギーは統合が困難であったことが背景にある。しかしベルギーは第二次世界大戦後は厳密な意味での永世中立という立場を改め、国際連合とNATOは発足時からのメンバーで、ヨーロッパ連合（EU）にも加盟し、ヨーロッパ統合には積極的な姿勢に転換した。スイスは2002年によく国際連合に加盟したが、EU、NATOには加盟していない。オーストリアは国際連合、EUにもともに参加しているがNATOには加盟していない。

最近では、中米の小国コスタリカは、1948年に軍隊を廃止して以来、憲法にも非武装を掲げているが、1983年にはさらに永世中立を宣言している。

スイスの永世中立

スイス連邦は、カントンと言われる主権を持つ地方組織の連合体である。ハプスブルク家からの長い独立の戦いを経てスイス盟約者団が国家の中核となり、1648年のウェストファリア条約によって独立を国際的に承認された。その後も周辺の列強の干渉や侵略を受けながら、武装して中立を守るという伝統を築いて行き、ナポレオン戦争後のウィーン会議で永世中立国であることが承認された。スイスの場合は、憲法で中立を謳っているのではなく、各国に対して中立であることを表明することで維持されている。スイスは第一次世界大戦、第二次世界大戦で大きな危機を迎えたが、いずれもの武装中立を守ることで直接的な戦火を免れた。しかし、戦後の集団安全保障の国際的な動きに対しては、国際連盟には加盟、国際連合には当初加盟しないという違いが見られた。2002年に国連には加盟したが、EU加盟は国民投票で否決され、実現していない。

もう一つの緩衝国家ルクセンブルク

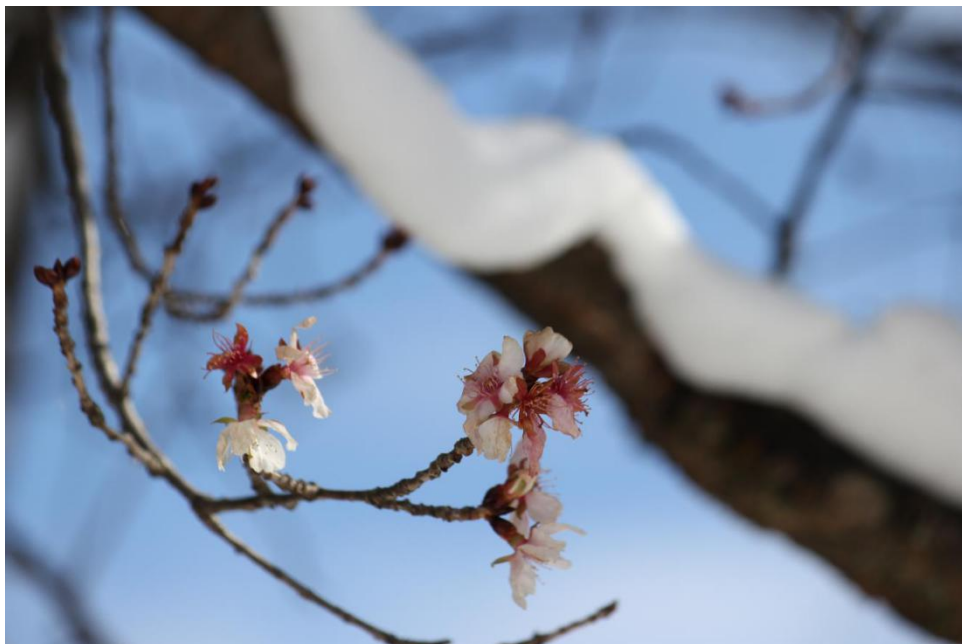
ドイツ、フランスにはさまれているルクセンブルクは、ウィーン議定書ではオランダ国王をルクセンブルク大公とする大公国としてドイツ連邦に加盟したが、その1866年の普墺戦争の結果としてドイツ連邦が解体さ

れたとき、その支配をめぐるフランスとプロイセンのあいだにルクセンブルク問題という対立が生じた。この対立は、翌年のロンドン会議でルクセンブルクが永世中立国とされることで妥協が成立した。ルクセンブルクはスイスやベルギーと同じ大国間の緩衝国家として永世中立国となった。しかしこの永世中立も二度の世界大戦でドイツに破られたためか、大戦後のルクセンブルクは永世中立を放棄し、NATOに加盟、さらにベネルクス三国を構成して欧州統合には積極的に加わっている。その点ではスイスとは異なっている。

第二次大戦後のオーストリア

1955年5月、アメリカ・イギリス・フランス・ソ連の4カ国との「オーストリア国家条約」によって独立（国家回復）が認められたオーストリアは、条約の規定に従い、同年10月、「永世中立に関する連邦憲法法規」（中立法）を制定して、世界に向けて「永世中立国」であることを宣言し、どの軍事同盟にも属さず、その領土に外国の軍事基地を置かないことを定めた。同時に国際連合への加盟も果たした。オーストリアは国際連合には加盟しているが、集団的自衛権を掲げる北大西洋条約機構（NATO）には加盟していない。ただし、協力関係にある。ヨーロッパ連合（EU）には1995年に加盟したが、その共通外交安全保障政策（CFSP）と中立政策は両立するとの立場をとっている」。

上記の下線部は「連邦共和制」が平和状態の創生につながる内容であると捉えたい。また、「多言語国家」（あるいは多民族国家）、「主権を持つ地方組織の連合体」の視点から「永世中立国」を捉える研究の必要性があると思います。この研究は日本という国のあり方を問うということです。



【コラム】

吹雪のなかで——「新しい資本主義」

論は何を意味するのだろう

中村共一

今年の1月に、昨年末に策定した「国家安全保障戦略」等の「安保三文書」を携え、岸田文雄首相は欧米諸国を歴訪しました。「攻撃能力の保有」や防衛費の増額等をふくめ日本の安全保障政策を大きく転換する「三文書」であったにもかかわらず、その歴訪は、国内の民主主義を飛び越え、アメリカをはじめとする NATO 諸国の支持や協力を取りつけようとしたものでした。そしてまた、通常国会の開会（1月23日）に臨んだ岸田文雄首相は、施政方針演説の冒頭において、事もあろうに自らの「新しい資本主義」の提唱が、これらアメリカを中心とする「国家連合」の「新たな経済モデル」に基づいていると明言しました。

施政方針演説で示された、この「モデル」とは、①「権威主義的国家からの挑戦に直面する中で、市場に任せるだけでなく、官と民が連携し、国家間の競争に勝ち抜くための、経済モデル」であり、また②「労働コストや生産コストの安さのみを求めるのではなく、重要物資や重要技術を守り、強靱（きょうじん）なサプライチェーンを維持する経済モデル」だと説明し、そしてまたこのモデルが、③「気候変動問題や格差など、これまでの経済システムが生み出した負の側面である、様々な社会課題を乗り越えるための経済モデル」であるとも述べています。

こう述べたうえで、「私が進める『新しい資本主義』は、この世界共通の問題意識（「新たな経済モデル」の模索…中村）に基づくもの」と明言するのです。そしてその内容を「官民が連携し、社会課題を成長のエンジンへと転換し、社会課題の解決と経済成長を同時に実現する。持続可能で、包摂的な経済社会を創り上げていきます」と語っています。

すなわち、岸田首相は、「重要物資や重要技術を守り、強靱なサプライチェーンを維持する」ために日本国家の課題を、「官と民が連携し、国家間の競争に勝ち抜くための、経済モデル」の追求におき、それにより「社会課題の解決と経済成長を同時に実現」できると考えているのです。こうした認識は、概して、保守的な政党・メディアの論議にも通じており、いわば、アリの眼で見れば、「現実主義的な思考」であるかのようです。が、タカの眼でみると、危うく、暴力的な「資本主義の末路」への「宣言」のように思えてなりません。

もちろん、「新しい資本主義」論は、政治家のイデオロギー的な「資本主義」認識だと「上から目線」で一笑に伏すこともできますが、ことは一国の首相の歴史認識だとすれば、その認識がもつ歴史的意義は大きく、無視されるべきものではありません。それは、「米中対立」が高まり、アジアの平和を損なう「軍事対立」に「積極的」に加担するものであり、国家権力によって国民の生命を損なう結果に導いていくからです。

岸田首相の「新しい資本主義」論は、「官民が連携し、社会課題を成長のエンジンへと転換し、社会課題の解決と経済成長を同時に実現する」と説明するものでした。キー・ワードは、「官民

連携」、「経済成長」、「社会課題の解決と経済成長を同時に実現する」という3点にあります。このキー・ワードを、換言すれば、現下の「社会課題の解決」は、「官民連携」による「経済成長」によって可能だという主張になります。でも、どこに「新しさ」があるのでしょうか。資本主義の特徴は、本質的に、「経済成長」にあるわけですから、この主張の「新しさ」は、「経済成長」というより「官民連携」という点に向けられているようにも思えます。しかし、これも近年の保守党政権のキー・ワードですので、それ自体、「新しさ」の内容とはいえません。やはり、岸田首相の「新しい資本主義」論は、結局、何なのか。やはり抽象的で分かりにくい。

いや、それでもやはりユニークさの手がかりはみえます。どこにか？ 「新しい資本主義」論のすべてを、アメリカの「経済モデル」に直結させている点です。

バイデン政権の「国家安全保障戦略」（National Security Strategy、2022年10月12日）をみてみましょう。「米国と世界にとって決定的な10年の始まりの時期にいる」として、アメリカが直面する「2つの戦略的課題」が示されています。「第一は、ポスト冷戦の時代が決定的に終わり、次に来るものを形作るために、主要国の間で競争が始まっていること」。そして「第二に、このような競争が行われている一方で、世界中の人々が、気候変動、食糧不安、伝染病、テロ、エネルギー不足、インフレなど、国境を越えた共通の課題の影響に対処するために苦闘しているということ」です。すなわち、「主要国の間での競争」（とくに中国、ロシア）と「国境を越えた共通の課題」（とくにカーボンニュートラル＝脱石油）への対処です。ここからすぐに推測できるように、岸田首相の「新しい経済モデル」の中身と基本的には一緒であり、実は、この経済主義的な国家競争戦略を受け止め、そこに自らをストレートに位置づけようとしていたのです。

「この国家安全保障戦略は、自由で開かれた、安全で豊かな世界という、より良い未来を実現するための私たちの計画を示すものである。私たちの戦略は、米国民の安全を守り、経済的繁栄と機会を拡大し、米国人の生活様式の中核にある民主的価値を実現し、守る、という私たちの国益に根ざしたものである。私たちは、このどれも単独で行うことはできないし、行う必要もない。世界中のほとんどの国は、わが国と両立可能な方法で自国の利益を定義している。私たちは、互いに協力しようとする国々からなる可能な限り強力で広範な連合体を構築する一方、より暗いビジョンを提供する勢力と競争し、私たちの利益を脅かそうとする彼らの努力を阻んでいきます。」（National Security Strategy、翻訳…中村）

岸田首相の「新しい資本主義」というのは、基本的に、このようなアメリカの「安全保障戦略」に同調し、「追随」——アメリカの利益にそって、その「連合体」の一員になる——しようとするところにユニークさがあるのです。創造的なものであるというより、「アメリカ至上主義」という点にあるわけですから、「ユニーク」という表現は適切ではないのですが。

もちろん、戦後日本の国家政策は、「日米安保条約」のなかにあり、すべて「対米従属的」であったわけで、なにも岸田首相だけのことではありません。それはそうなのですが、これを、戦後世界資本主義における覇権（ヘゲモニー）国アメリカの衰退、そしてまた、新たに展開されてきた「アメリカン・グローバリゼーション」（新自由主義＝新帝国主義）の進展、さらにはアメリカの「国家安全保障戦略」の再構築といった歴史的な経過を踏まえてみると、先の「新たな経済モデル」が、こうしたアメリカの戦略と直結していることがわかり、岸田首相のユニークさが「不気味なリアリティ」をもって浮かび上がってくるのです。しかも、中国をはじめとする BRICS 諸国との不均等発展をうけて、アメリカ・ヘゲモニーの衰退を加速させ、軍事的な対立・衝突（とくにイラク戦争以降）を生みだしている国際的文脈のなかに、その「新たな経済モデル」を置いてみると、さらにそのリスクな正体が明白になってきます。そうした歴史的現実に対応した「国家連合」の一員であってみれば、彼のユニークさは、まさに「軍事的なリスクを積極的に引き受けようとする対米従属性」にあると言えるのです。ですので、岸田首相は、「国民の声」を聞く

必要もなく、むしろアメリカ第一で、アメリカの「国家安全保障戦略」に寄り添いながら、日本の国民国家を再構築していこうとするのも、彼からすれば、当然のことなのでしょう。

同じ新自由主義の「信奉者」ではあるものの、安倍晋三首相は、それでも「日本」にこだわったわけですが、岸田文雄首相は、「日本」を棄て、「アメリカの一部」になろうとしているようです。両者の派閥争いの根も、ここにあるのかもしれませんが。しかし、いずれにせよ、根幹にある新自由主義は、「新しい資本主義」であろうとなかろうと、一方で、多くの国々において「グローバリゼーション」を進展させ、「福祉国家」を分断・解体させ、他方で、ウクライナ戦争や米中対立など、帝国主義的なグローバル化をすすめ、あらためて諸国間の世界的な分断・対立を深めていくものとなっています。したがって、そこに加担しようとする岸田政権の政策は、今回の施政方針の具体的な内容においても、その一翼を担うべき安全保障（軍事）体制を構築しようとする彩に満ちています。「こども・子育て政策」も、「マイ・ナンバー」も、戦前と同様な「戦時体制」の一環として構築されていくものなのでしょう。あらためて恐怖を感じてしまいます。

資本主義の「経済成長」は、「グローバリゼーションをめぐる国家対立」にあって、「官民連携」の中身が変容し、「民営化」から、さらに「軍事化」の特徴を帯びるようになっていきます。アメリカやロシアのように、日本においても、「民間軍事会社」が誕生し、そこに国家が政策的に連携していくような事態の進展が、目の前にあるような気がします。グローバリゼーションのなかで社会は、バラバラな私人に分断され、連帯する「場」（中間組織）が持てないまま、「他者を手段化する」諸個人によって秩序づけられています。諸個人は、お互い、自己閉鎖的に係わらざるをえないがゆえに、ちょっとした生活秩序のトラブルですらストレートに国家の法的・権力的な秩序に依存する傾向（ナショナリズム）を強めてしまいます。国家の軍事化も、当然視してしまう「空気」がそこにあるのです。それだけに、政治的腐敗が世論になっても、岸田政権の軍事化を簡単に見過ごしてしまう。まさに深刻な「社会危機」に直面しています。

資本主義は、もともと国民国家を成立させ、「想像の共同体」を築いてきたわけですが、現代資本主義（とりわけ「グローバリゼーション」）の発展は、「想像の共同体」を破壊し、租税の再配分を本質とした国家までも食い尽くし——民営化——、国家を資本主義の「暴力装置」に変質させています。すでにみたように岸田首相の「新しい資本主義」論は、まさにこの「暴力装置」の役割を積極的に引き受けていくものでした。これが、文字通り、「新しい資本主義」を展開するものだとは、到底言えません。むしろ、アメリカ・ヘゲモニーの傘下にあるとはいえ、ふたたび世界戦争という「資本主義の末路」に突き進むものだといえます。資本主義の側から、単刀直入に言えば、アメリカ・ヘゲモニーも、日本を含めた先進資本主義諸国も、資本主義の「成長主義」（資本過剰）に翻弄されて、「国民国家の拡張」（柄谷行人）をすすめ、それによって繰り返し「世界戦争」を余儀なくされてきたといえます。「新しい資本主義」論は、結局のところ、このような「資本主義の末路」における「断末魔の叫び」のようにも聞こえてきます。資本主義は、本質的に、国家対立を越えた、平和な世界秩序とは無縁なのです。であればこそ、国民国家（ネーション）までも破壊していく、資本主義そのものが「社会問題」としてあることを、改めて認識すべきでしょう。資本主義と国家を越えていくことが、「根源的な課題」として私たちに突き付けられているのです。

世界戦争が繰り返されているように、世界平和運動もその繰り返しのなかにあります。しかし、資本主義は世界戦争を止めることができないとしても、平和を追求する人類には、「歴史の教訓」を活かす平和力があります。「三度目の正直」が試されている今、その「平和力」こそ、批判的に「想像＝創造」されなくてはならないのです。

（なかむら きょういち）

同僚性の欠乏

塩小路橋宅三

未成熟や未発達「未」は欠乏のように考えられているが、そうではなくて可能性を現しているのである。しかしながら、本来的に同僚性によって結合しているはずの大学の教授会に、階層支配の企業性を持ち込んでくるのは欠乏と言わざるを得ない。大学の教員にはファカルティ・ディベロップメントという同僚性において教員の能力を高めていく活動があるが、まったく本来の目的を達せずして組織における上からの方針管理に活用されている現状がある。サバティカル研修などは眼中にない状況で、旧臘、元同僚と忘年会を持ったが、そこでの結論は「今の大学は大学ではなくて、行政機構の一部に成り果てた」であった。

資本主義は人類最大の発明かもしれない。民主主義と資本主義のカップリングにとどまらず、中国のような権威主義的資本主義も生み出したからである。これは決して国家社会主義ではなく、専制政治と資本主義がカップリングになった国家資本主義である。資本主義対資本主義であることを忘れてはならない。民主主義が権威主義に取って代わる傾向は、同僚性の牙城であった日本の大学の教授会にまで波及している。つまり、理事長は経営者で学生はお客様であり、教職員は従業員としての階層的支配が受け入れているのである。ラインなどのSNSで教員と学生の管理が強化されることになる。学校からの連絡事項をラインを使って教員が所属ゼミ学生のネットを構築することは、利便性を隠れ蓑にした管理強化である。かつて大学からの連絡事項はすべて掲示板の張り紙であった。担当教員が自宅の固定電話に連絡してくることなどは余程のことであった。学生同士がSNSでコミュニケーションを築くことは自由であるが、教員がそこに介入することは控えるべきと考える。

大学がモノの生産のようにPDCAサイクルで入学から卒業まで管理することは間違いなのである。ベルトコンベア方式で就職につなげることが大学教育での目的でも到達点でもない。コミュニケーション的滞留によってヒトを創ることが使命であったはずである。文科省の教学マネジメント指針などは言葉だけの学生本位の教育をうたっているが、モノの生産管理と社会人力育成を融合させた教育の効率的管理に過ぎない。これを現場の大学教員が大真面目に行っていることに、かつてのファシズムの胡散臭さを感じる。今回のコロナ禍においては企業のための産業兵士どころか、国家のための本物の兵士の育成を目指しているのかもしれない。コロナ禍に乗じて日本が戦争のできる国にするためのデジタル化のように思えてならない。現在では教員間の同僚性は分断されているが、デジタル化によって国民国家完遂のための間違った同僚性が再構築されようとしている危険性を感じる。

そもそも大学とは学生と教職員の共有地であったはずである。その共有地内にいるものは同僚なのであるが、知らぬ間に階層的管理が常識化してしまっている。本来、当事者であるはずの学生はお客様扱いをされて管理されているのである。かすかに共有地的要素であった図書館もコロナ禍においては閉館であった。現代の共有地と思われる空間はいとも簡単にロックアウトされたのであった。しかも、そのことが感染症拡大防止に効果があったかは定かではない。もう元に戻らないと関係者は言っているが、失ったことの大きさを考えると、いったん元に戻さなくてはな

らないし、そこでの異常状態にて卒業らしき認定をした大学当局は、その対象学生にアフターケアをする責任がある。コロナ禍を忘れてしまおうとすることではなく、卒業生に対する追跡調査が必要であると確信する。ところが、世間で言うデジタル化が肝心な同僚性を破壊してしまっているのである。

一年を通じて市民の科学が必要と繰り返してきた。ところが大学では、相変わらず「実学」と称する就職訓練が行われているようである。実際の経営を知識として知っておれば、経営学など不要というような勢いである。私はこれを「学術的ポピュリズム」と考えている。一方ではこのような反知性主義に対抗してジャーゴンが横行して、専門家と称するムラ社会の人々と市民との乖離が生じている。その間隙を縫って、パソコンのリテラシーと外国語が堪能ならば心配はないとばかりに、これも消費文化を象徴するような資格検定が横行している。会計ソフトの使い方を知っていれば、会計学の素養など必要ないと言わんばかりである。ムラ社会における閉鎖的な間違った同僚性が、「議論なし、批判なし、思想なし」の勢いを増してきている。まさに保身を図る権威主義的同僚性への変質である。コロナ禍を通じて市民権を得てしまったデジタル化に対して市民的批判が必要と考えている。と同時に、あらゆる場面における同僚性を考え直さなければならない。

医療機関で体調不良を訴えれば、その症状を緩和する薬を処方してくれる。その薬が胃を荒らすかもしれないとして別の薬も処方してくれる。さらに、精密検査に基づいて対症的な治療が説明される。それを当たり前として聞き入れているが、根本的な体質改善については困難を承知で説明してくれるが、医師の言う通りの生活習慣ができるかは不確定である。大学における教育も同じことが言えるのではないかと考える。学生に対して就職のための資格取得を奨めるだけで十分であろうか。就職訓練よりも職業教育が必要なのではないかと思う。対症的な取り組みを超えた体質改善による同僚性が必要なのである。

何のためのデジタル化なのか。「中国に負けるな」式で推進されるマイナンバーカードの信用スコア化は何を意味しているのか。幸せな監視社会である中国が日本人にとって理想の国なのかと問うてみたい。あのウクライナでの戦争においても、最新のハイテク兵器を使いながら土地の取り合いを演じている前近代的 20 世紀型戦闘を動画で見ることができるので、こんな愚かなことはやめるべしとなるのである。もしこれが映像でとらえられないでサイバー攻撃によるデジタル戦争であったならば、現代人類の絶滅の第一歩と言えるのではないかと思える。現代人類は平和的友好を愛する男女から生まれた子孫の世代を超えた繰り返しによって繁栄しているのではないかと考えられる。「人類みな兄弟」とは同僚性の発露であると言っても過言ではない。大学教授会がムラ社会における間違った同僚性、欠乏の同僚性によって階層的支配構造に組み込まれることは何としても阻止しなくてはならない。

(しおこうじばし たくぞう)

将来人材に希望を託す

ーキャリアアドバイザー体験記・秋から冬へー

眞島正臣

10前年に日本キャリア協会を通じて応募のあった教育ボランティアという形で〇大学での進路準備、キャリア計画の実施に参加するという協力を合意し、登録していた。

私は、コロナ禍が発生するまでは、キャリアカウンセラーの資格を取得後、職業訓練や専門学校の講師を通常勤務者として就業していた。今年になり、再度呼びかけがあり〇大学の教育ボランティアに参加した。

その内容は、2回生のキャリアプランのプレゼンテーションに立ち合い、意見を述べる仕事を与えられたのである。

キャリアカウンセリングは、個別の面談形式で、回を重ねて行うのが基本形である。適性検査などの心理テストをアドバイスの根拠として参考にした上で個人の内面へ寄り添っていくのである。今回のような集団で発言に傾聴反射する断片的なアドバイスの場合、スタンスを次のように考えている。（１）学外の社会人として学生のプレゼンテーションを評価する。（２）クライアントである学生の側に立ち、全面肯定の立場で支援する。独り２役の態度で発言を行ったのである。私はキャリアカウンセラーの役割を個人が一人一人持っている「拠り所」に気づかせることだと思っている。もう少し説明すると、『社会経営学研究』（重本直行編著、晃洋書房刊）（注１）においてシャイン学説を取り上げさせていただいた有名な理論を根拠にしている。シャイン学説のキャリア・アンカー「８つのカテゴリー」の個人が持つ内なる強み及び強み弱みを発見させることだと思っている。分かりやすく説明すると金井壽宏教授が「個人が自分を貫くための拠りどころ」（注２）と論文に書かれている際の心理状況である。

大そうな構えのルポルタージュに見えるが、実際には、４日間の勤務だった。ボランティアというものの、若い学生がどのような未来に挑戦しようとしているのか、垣間見ることができた。IT導入の授業がどのように実施されているかを知ることが出来た貴重な体験であった。キャリアカウンセラーの職業義務として守秘義務を課せられているので、名前を伏せて、主に学生たちの自己成長へのキャリア・ビジョン発表を中心に記録をまとめることにする。

ところで、近々の就職動向を後日、調べたところによると、「安定志向」は、これまでと変わらず、学生の希望を叶えられる大企業、中堅企業への入社は、かなり困難な激戦状況であることが把握できた。

「コロナ禍不安定な状況の中そのような心理が強まったのか、２２年卒では、従業員５０００名以上の企業に就職を希望する学生の割合が例年以上に高くなっています。」（「School to Work ５つの論点」リクルート就職みらい研究所増本全所長）

<https://hr-age.humanage.co.jp/interview/2114/>

〇大学は厳しい就職状況に立ち向かえるように４年間かけて訓練させ、就職後にも自己成長できるように準備システムを身につけさせているのである。４年間に学ばなければならない社会人基礎力学習過程のカリキュラムは、我々、教育ボランティアへメールで配布されていた。これか

ら教育ボランティアのキャリアカウンセラーとして私が取り組んだアクションを振り返り考察しつつ、叙述をしていく。

1、大学就学4年間の重要カリキュラム「キャリアデザイン」

近年、在学中に「社会人基礎能力」を身につけ就業力を十分に修得しておくことが求められるようになった。私が担当した0大学では、キャリア（人生進路）の学習計画を四年間に渡り、一年次から四年次に分けて、レベルを設定し、確実に成長できるようにされている。学年末に、キャリアプラン発表の機会を設けておられるのである。今回、私が配属されたのは、2年生であった。①現実社会を理解し、希望の職種へ就業できるようにするには、どのような準備をすればよいか考える。②自分の強み、弱みを理解し、夢を実現するために弱みを克服するには、どうすればよいか理解する。③二年次までに学習した専門的学問を踏まえて、自己の強みを生かすための計画を分かりやすくプレゼンテーションする。④5W1Hの必要な構成要素を組み合わせ担当教師、クラスメイトに伝わるように報告する義務がある。

4回生の卒業前の時点では、プレゼンテーションフェスタという総仕上げに参加しなくてはならない。この行事の発表題名のリストもメールで送付されて来た。私は、4回生のフェスタに出席出来なかった。目標は、個々の学生が社会人としていかに活動し、働くかというビジョンを就職試験では応募企業に向けて説得しなければならないのである。

2、2年生のプレゼンテーションに立ち合い感じたこと、コメントしたこと。

（1）11月22日、「現代社会学部、情報・コンピューター専攻学生」の発表

学部は、「現代社会」であったが振り返ると、今回かわりを持ったクラスの中では、充実したプレゼンが出来ていると思われた。5名の発表者が将来活躍しようとするIT業界やゲームプログラミング業界に関してイメージを描いており、目標が半ばであるが把握できていた。アルバイト先での仕事体験から、マーケティング理論に通じる戦略が身近で実践されていることに気が付いた学生がいた。自己分析と就きたい職業との結び付けを論理的に報告できた学生が何名か存在した。記憶に残ったM学生は、「教育ICT」分野を目標にしたいとプレゼンをした。「教育ICT」（注3）とは、解説するまでもないがITを教育分野に活用するシステムづくりのことである。担当のM教授が、多様な応用分野が開発されており、すでに実践されており、限りなく奥深いと報告者の趣旨に補足をされた。技術を武器に就職しようという狙いで学んでいる学生らの意気込みを感じるクラスだった。全員、パワーポイントを使い、スマホ動画で個人の発表を記録し、提出するというのが受講科目取得の決まりである。

付け加えたいのがIT技術を学ぶ学生のプレゼンテーションにおいて、大学で学んだものを社会でどのように活かすかを論理的に説明しない場面があった。映像とサウンドデザインのIT技術的な融合についてベテラン職人のように高いレベルを駆使するに至ったという。学内のイベントなどで活用し、応用することの実験報告をするのだが、自己の将来にどのように役立てるかが思考されていない。自己満足に終わっていた。アニメーション・コンテンツの制作会社などを目指すようであった。彼にとっては、技術さえ修得すれば、就職はどうにでもなるという技術信仰があるのかもしれない。個人面談でないので、深く立入らなかった。短い時間では、講師の意見が否定的だと誤解を生む。

（2）11月22日、「現代社会部、経営学を学ぶクラス」のプレゼンテーション

このクラスでは、プレゼンテーション発表の学生がたまたまであろう。志望業界の選択を明白にしているのが印象的であった。女子学生で、自己評価をしっかりとできており、人と接するのが好きであるからホテルなどのサービス業界、観光業界を目指すという。現在のアルバイト体験でも就職のインターシップのような職場で手ごたえを得ており、安定感が見られた。話し方も落ち着いて明朗である。この女性は、就職試験に合格すると内心太鼓判を押した。また、意外ななこ

とに、男子学生がNPOのような非営利組織への希望者がいた。もう一人は、公務員希望者であった。NPO希望者は、学外活動で、すでに非営利組織を経験しているという。目標のない学生と違い、営利企業とは違う働き方に情熱を燃やそうとしているので、肯定的に感想を申し上げた。もう一人の公務員希望者は、地域の都市改革に貢献したいという勉強家であった。神戸に住んでおり、神戸をモデルに地域問題を学習して来たので、よく似た横浜を現地視察したらしい。やりたい仕事と地域都市改革のビジョンを重ねて、これを公務員として実践すると結論付けた。非常に明快で、堂々たるキャリア・プランだと思った。補足するがこのクラスでは、アドバイザーが2名であった。私の他の教育ボランティアは、心理学研究所を運営されている方で、心理学から報告者の内面分析と行動分析を行い、キャリア・プランへのアドバイスをされた。正攻法であるなと勉強させて貰った気がした。

3、資格に挑戦する学生のために大学内に講座が開かれており支援体制充実

(1) 11月29日、「国際日本学部で国際文化、国際コミュニケーション専攻」の学生のプレゼンテーション

これまでと同じく、2回生の発表であったが進路に重点が置かれず、2年間の学問蓄積の研究発表のようであった。人文科学系の学部と察知したので、講師自己紹介の場で、就職に苦労した自己体験を通じて、大学で学んだことを仕事に活用した事例を具体的に理解させた。彼らは学んでいることと仕事との連動を考えてはいるものの教員希望者は一名であった。キャリアカウンセラーにおいて、個人の体験を事例として話すべからずというのが原則である。学生に曖昧でなく明解に理解してもらうために、とっさに対応し、文学部出身の立場でコメントをすることにした。私にとっては大いに盛り上がり、やり取りの交換が出来たクラスとなった。

まず、女子学生の最初は、日本史の研究課題で、「戦国時代の食生活研究」であった。大学院生の研究成果と言ってもいいぐらいに掘り下げられており、ここまでまとめる力量を實力と見てよいとコメントした。この女子学生は、教員希望であった。

もう一人の女子学生も日本史で、「元禄歌舞伎の成立」であった。書誌学上の蓄積を報告されたが、掘り下げ、独自の見解、研究への奥行きは感じられなかった。教科書的理解にとどまり、実際の歌舞伎は最近、南座で、近松門左衛門作の『女殺油地獄』を観たのみという。この学生は、情報検索と研究での構築力を自己評価していると捉え、仕事に活用したいと主張した。「歌舞伎は趣味にしておく」という。私は、「歌舞伎研究は、趣味であっても生涯の宝物になる」と励ました。男子学生はユニークな発表をしてくれたので、進路よりも世界史、日本史の歴史談義をするような質疑応答になった。一人は、3回生、4回生では、西洋史のゼミを取得するという学生が、「アレキサンダー大王の時代」をまとめ報告してくれた。堂々たる研究の幅広さであった。この学生は、組織のリーダー論と帝国主義の成立に興味があるらしく、卒業論文は、ナポレオンとフランス革命を研究したいと言った。私も、I. ウォーラステイン『近代世界システム』を読むべきだなどと、年長者ぶりをして推薦図書を挙げたりした。卒業論文指導教師でもないのに、立ち入るべきでない。反省すべきことである。もう一人は、日本史で、「明智光秀の情報戦略」であった。この人も3回生、4回生は、西洋史のゼミだという。卒論の課題はプロパガンダを研究したいので、「ヒットラーの大衆操作」をテーマにするという。近々のウクライナ侵攻の世界動向が若い人間に、戦争論や世界支配やプロパガンダなどが思考領域として影響を及ぼしていると感じた。「明智光秀は、どうなるのか」と尋ねたが興味の対象が急転するのも若者らしく面白いので大笑いした。当人は、大真面目である。男子学生共に、研究は趣味にとどめるという。授業終わりのベルが鳴り、就職とどう結びつけるかアドバイスする時間が失われた。中途半端に終わり、心配なまま、教室を去ったのである。

4、起業プランを完成させた報告など

目標明確な学生と思考不足な学生

(1) 12月5日「現代社会部、経営学専攻」のプレゼンテーション

この日のアドバイザーの仕事は、三井物産を定年退職した後、大阪の職業訓練校で指導担当をしている60歳の女性と並んで担当した。大学のキャリアセンターからの配属指示である。ぶっつけ本番であるが授業開始前に最近の職業訓練の傾向に付いて情報を聴いたりしていると、事前打ち合わせになった。「勤務場所の中之島繫がりで打ち解けた」と笑ってくれた。年長者だからということで、私の後に発言をするルールを決め、一步譲ってくれた。ペア体制は、スムーズに進展し、女性の柔らかさで成果を得たと思う。

このクラスで印象的であったのは、自己のファッション主張を形にした、ブッチックを起業したいと言った男子学生である。

題名は、「自分の思い描くライフスタイルへ」であった。現代社会学部、HR学生は他の学生より、年長であるかもしれない、密度の高いまとめ方だと思われた。母親がファッション関連の仕事をしており、子供の頃から、自分も関心があったという。マーケティング手法により、事業計画をまとめ、理解しやすく、ゆるぎのない充実したプレゼンテーションであった。このプラン実施は、45歳と腹案を話したので、ターゲティングを若者に行っているから若い間に、スタートすべきであるとアドバイスした。もう一人、父親が大企業の下請けの製造業を現在、経営しているという学生が起業を希望していた。どのようなビジネスになるのか曖昧な報告であった。担当の教授は、しきりにWhatを明確にせよと何人もの学生に注意した。注意された学生は、一人は観光産業への就職をめざしながら「旅行業務取扱管理者」(注4)試験に落ちたという人。アドバイザーの女性も私も、合格するまで挑めばよいとエールを送った。資格も大事だが、キャリアプランが曖昧だと教授に指摘されていた。もう一人Whatを明確にせよと教授から指摘された学生は、「情報をビジネスにする仕事」を目標にしていると発表した人であった。パワーポイントの作成がデザイン感覚もよく伝達したい内容が絞られていると私は、評価したが「情報」という目標設定が漠然としていると教授は再考を促した。このクラスの女子学生のキャリアプランに対して、私の助言が、コロナ禍の状況を考えすぎ、将来を展望しておらず反省している失敗があった。東京デズニールランドへ行き、「キャストの魅力」を感じたときの感動が忘れられない、「テーマパークで働きたい」という報告であった。私は、大人の冷めた目で、大手は優勢だが地方のテーマパークは苦戦していると夢を壊すようなことをいった。女子学生クライアントの願望へ応援出来なかった後悔が残った。最新の外国からの観光客リバウンド後のテーマパークの動向(注5)を詳しく把握していないのに軽率であった。

5、アート系の学部に対して経験を話し会話するような進路指導

12月13日、「建築&芸術学部の学生」のプレゼンテーション

O大学は、学生に楽しく学んでもらおうという方針で、手厚い指導とシステムを構築しておられる学校だなということを感じたのが、最後に担当した建築&芸術学部のプレゼンテーションであった。IT系の学生のように就職に強い武器を手にしたという勢いを感じさせるクラスとは違い、就職に自信なさげで、不安げな顔が並んでいた。キャリアセンターの配慮だろう、広告会社でマーケティング戦略企画や広告表現制作担当であった私が配属されたいことを察知した。過去の経験であるが京都市立芸術大学のキャリアセンターの職員試験の二次面接まで行き、合格しなかった。音楽部の学生の就職に関する考察が手薄だったことが原因だった。定年まで勤務した企業の他に、土曜日は、デザイン専門学校で長らく講師をしていた。デザイン専門学校は後半、Webデザイナーの職業訓練校に変更され、継続して勤務したのである。

自己のかつての仕事現場を事例に話したら、安心したように私の話を聞いてくれるようになった。打ち解けて芸術学部の講師みたいな話し方になった。

当日、プレゼンテーション担当だった学生は女性が3名。男性が1名だった。女性の2名は、

絵画やイラスト専攻の学生で、いずれも、これまでの成果物である作品をパワーポイントで公開してくれた。プロになるため訓練は、熱心に取り組んでいるようで、「画力」、「表現力」、「アイデア出し」という表現シンキングの苦労を説明していた。同時に絵画のテーマをどのように設定し、咀嚼し、昇華するかの苦心も話してくれた。深く、何度も考える訓練が出来ていると思われた。林檎のモチーフを中央に置き、オランダ画家のエッソーヤーのように梯子を描き、空想を拡げて画面構成がされていた。広告会社でイラストレーターに仕事を依頼したときの経験を話し、ここまで作品を作り上げた実力を観させてもらおうと、プロとして活躍できると判断する回答した。もう一人の女性は映像専攻ということで、現在は、デジタルの仕事が多いが、自分の経験では、スチール写真と動画は専門が別れており、広告キャンペーンの表現の場合、両方の分野のプロに依頼すると説明した。マスメディアよりも Web 広告の時代であるとも説明した。男性は、映画学科専攻で、「日本映画業界の未来」というプレゼンテーションを報告した。フランス=CNC, 韓国=KOPIC というように映画製作支援機関があるのに、日本にはない。日本版 CNC を設立すべきだという趣旨の発表であった。彼は映画監督志望である。果たして食べていけるのかを考慮してのプレゼンテーションであるらしい。真剣さが滲み出ていた。このクラスの教授も映画学科専攻らしく、報告者の映像作品については、周知のようであった。「大人たちが頑張れとはやし立てて潰したらあかん」といっておられた。学生に「最近の映画監督では、誰れが好きか」など質問をされていた。

私は、後に質問案が浮かんだ。映画監督になるためにはスタッフの生活まで考えているのかという学生への問いかけである。教授は、格式張られない、磊落な人柄で、私のアドバイスを学生の意見とうまく結びつけられ、最高に交流できた時間になった。私のアドバイスの評価は学生が授業報告として大学に届けることになっている。

6、まとめ=コロナ禍をくぐり健やかに学ぶ学生らに勇気を与えられた。厳しい令和5年の現実にも挑もうとする気構えを感じた。

4日間の教育ボランティア活動を体験して振り返ると、ほとんどアルバイトと学業を併行しており、現実の厳しさを実感している堅実な学生が多かった。

キャリアプランは、あくまで設計図であり、行動に移すのは、4回生になってからである。「自分は何をやりたいかわからん」という学生も少数だがどの教室にもいた。自己分析を行なっていない学生を目の当たりにした。リモート授業の苦労など聞いていないが、学生間に落差が見られる。

生活のために「自己成長」という内なる願望や拠り所を封じ込めるという、過去の常識は、現在では通用しないことを実感した。リクルート就職みらい研究所所長の増本全氏の見解では、企業に「自己成長」のための環境を求める傾向が強くなっていると言われる。「組織に依存するリスクを実感し、自己成長の機会を主体的に選び取る重要性を意識する人が増えました。また、社会全体のワークライフバランスに対する意識も高まりもあり、個人が企業の持続可能性を大きく3つの視点で判断しているように思います。

自らの能力・スキルの向上や成長といった「個人のキャリアの持続可能性」と、環境やライフステージの変化があっても柔軟に働ける「働き方の持続可能性」、そして、「組織としての持続可能性」です。」（注6）激動時代の企業研究をしている学生には、正規雇用の採用に合格しても、生涯安定したワークライフを持続できるかどうか未知である。組織に頼らず、自己自立を一方で考慮しなければならないという心理は、働くだろう。企業に頼りすぎであった過去の私自身の帰属意識を回想すると、4日間に会った学生は、やはり、時代の厳しさを感じて、資格を取得しようとしたり、防御対策に熱心だという気はした。

若者にありがちな大それた希望を抱かず、着実な人生を歩もうとする学生が多いという感想である。0大学は、総合大学でないので、製造業や法律分野など現実社会全体を見渡す領域が他所

にあるので、代表的な現代モデルとしては、捉えられないと思う。少子化時代に我が国の将来を担う人材として今回の学生たちは、貴重だと考えるのである。

キャリアカウンセラー理論では人間は一生、老いて最後まで成長するのだという。

2022年12月14日、中之島フェスティバルホール「ベートヴェン第九交響曲の夕べ」演奏会の客席にいた。チケットを贈ってくれた短歌仲間が合唱に出演していた。

「兄弟よ！君達の道を走れ、勝利に向かう勇士のように楽しく」（7）合唱を聴きながら、自らの教育ボランティアの労を労い、4日間に会った学生らの長い人生の成長を心から祈ったのである。

<注>

（注1）『社会経営学研究』第七章「組織心理学から支援学への推移」眞島正臣論文

（注2）同上論文 269 頁

（注3）「教育ICT」

ICT教育とは、教育現場にてPCや電子黒板、インターネット、動画などの“情報通信技術”を活用した取り組みのことを言います。なお、ICT教育の「ICT」とはInformation and Communication Technologyの略称であり、和訳すると「情報通信技術」を意味しています。

https://www.mobi-connect.net/blog/ict_for_education/

（注4）「旅行業務取扱管理者」 旅行業務取扱管理者は、旅行業界で唯一の国家資格！有資格者は、旅に関する豊富な知識・技術を有したプロとして国から認められます。資格は全国で通用し、一度取得すれば生涯有効。旅行業界への就・転職、キャリアアップも有利に！

<https://www.u-can.co.jp/%E6%97%85%E8%A1%8C%E6%A5%AD%E5%8B%99%E5%8F%96%E6%89%B1%E7%AE%A1%E7%90%86%E8%80%85/about>

（注5）【人気投票 1~30 位】遊園地・テーマパークランキング！みんなのおすすめは？

<https://ranking.net/rankings/best-amusement-park>

（注6）（「School to Work 5つの論点」リクルート就職みらい研究所増本全所長）

<https://hr-age.humanage.co.jp/interview/2114/>

（注7）「第九交響曲の夕べ」プログラム大阪新音

（まじま まさおみ）

篠原三郎と柄谷行人（3－終）

—史的唯物論への疑問と未来への展望—

宮崎 昭

篠原先生がマルクス『資本論』を参照して、「管理の二重性」、「商品の二要因」について異議申し立てをしていたことを、前回紹介しました。端的にいうと、マルクス自身にも問題があったのではないかと、という重大な指摘でした。

一方、柄谷さんは、さらに厳しい論定が下されています。いずれも、「史的唯物論」への根柢的な疑問が出発点にあり、その上での批判でした。

（十二）

今から 30 年近く前に発表された、篠原先生の短歌です。

ロシアよりロシアに帰るわが世紀また哀しくも銃声を聞く

（篠原[1994A]318 頁）

ロシア革命への忸怩たる思い、そして今となっては、まるで予想していたかのようなウクライナ侵攻（侵略）の悲劇、「史的唯物論」への理論的な関心の根源にある心情だと思います。

その基本的な姿勢は、「現実の社会主義が崩壊しようが、理念としての社会主義が潰え去ってしまったわけではない」（篠原[1994B]278 頁）とあって、迷うことなく明快です。この点は柄谷さんと同じです。ですから、社会主義を論じるにあたって、そこでの「事実」のあれこれを検討することも必要なのですが、まず何よりも社会主義を根拠づける、理論的な検討が優先されます。「研究する」ということは、そういうことです。篠原先生は次のように述べています。

私見についていえば、史的唯物論のような一般的定式によって、資本主義とか社会主義とかいった具体的な次元のことを具体的に論じることはできないし、むしろ、それは誤りであるとみている。…（略－宮崎）…もし必要とあれば、資本主義の科学的な研究の成果にもとづいて、史的唯物論は、むしろ再検討されるべきではないかとも考えている（同上、279 頁）。

改めてこれを読んで、さすがに、この指摘には目を奪われました。後でも触れるように、柄谷さんが『力と交換様式』で究明されてこられたテーマこそ、これだったからです。紹介するまでもなく、同書の第三部が「資本主義の科学」であり、第四部が「社会主義の科学」でした。実際、この二つの部に先駆けて、第二部「世界史の構造と『力』」の冒頭では、「本書で、私は、ひとまず史的唯物論の枠組に従いつつ、それでは十分に説明できない諸問題を、交換様式とそれらがもたらす力という観点から見ようとしてきた」（柄谷[2022]191 頁）、と言っています。史的唯物論を真正面から否定するのではなく、生産様式論から交換様式論への“土台”変換によって、再構築しようとするスタンスです。

ところで、篠原先生の史的唯物論批判は、「生産力と生産関係」を基軸においた、この理論の基本的な枠組みに矛先が向いています。要するに「生産力」とは何か、その歴史性という問題提起です。前回取り上げた、労働過程や使用価値を論ずる際に言及された論点と同じ性格をもっています。

(十三)

史的唯物論の内容を的確に示しているといわれる、マルクス『経済学批判』の「序言」ですが、篠原先生の引用に助けられて紹介します。長くなります。

「…ひとつの社会構成は、そのうちで発展しうるすべての生産諸力が発展してからでなくては、けっして没落せず、また新たな・より高度の・生産関係は、その物質的な実存諸条件が旧社会そのものの母胎内で孵化しおわるまでは、けっして従来のものにとってかわりはしない。だから人間はつねにみずから解決しうる問題のみを問題とする。なぜというに、よく正確に観察するならば、問題はつねに、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか・あるいは少なくともその生成の過程にあるか・のばあいにはのみ、はじめて発生するものだから。ごく大づかみには、アジア的の・古代的の・封建的の・および近代ブルジョア的の・生産様式が、経済的社会構成の進歩の諸時期として特徴づけられうる」といっている叙述から推察されるように、そこでは、いかなる生産様式においても一貫して生産力が発展してきたものと想定されているようだ（篠原[1994C]263－264 頁）。

篠原先生の見解は明瞭です。生産力の「歴史的」性格が問われてしかるべきであり、労働過程や使用価値についてと同様、生産力を「一般的」で“超歴史的”として見る見解に対する批判です。つまり、「生産力の歴史的に規定しているものがまさに社会関係である生産関係にほかならないということである」（篠原[1994B]281 頁）。生産力は、それ自身の独立して宙に浮いたような論理に従うのではなく、生産関係という社会的な関係によって規制され、制御され、規定されるという主張です。

くどいようですが、あの労働過程や使用価値も、「それ自身の独立して宙に浮いたような論理に従うのではなく」、価値増殖的過程や交換価値によって歴史的に規定された存在としてしか、ありえないということです。だから、生産関係は生産力の要素であり、また生産力は生産関係の要因でもあるということになります。にもかかわらず、生産力が“歴史貫通的”であるというのは、いかなる根拠があつてのことなのか、さらに追及の手が及びます。

…『資本論』は、産業資本が全社会的に支配している資本主義を対象に考察している。資本主義的生産過程の生産性は、したがって、生産力は、既述したように、絶えず高まっていくものとみなされている（篠原[1994C]263 頁）。

だから、「本源的蓄積期以前の社会の生産力」は、「商品、貨幣、資本といった物象的な関係の展開にみられるような必然性」に規定されるものではないので、さらにはそこでの「経済過程が政治的権力など、その他の権力に支配されている」ので、生産力が絶えず高まっていくような背景なり仕組みがないのです（同上）、そう言われています。

…ア・プリオリに、生産力の発展を、すべての社会に、共時的に、通時的に認めるのは、商品経済とその論理が全社会的に支配している資本主義での生産過程のイメージを、他の社会での生産過程に投影してみているからではなかろうか（同上、266－267

頁)。

生産力の“歴史貫通的”なる観念は、実は資本主義におけるイメージを「全ての」社会に、あるいは「前」社会に投影した所産であると、篠原先生は断定します。この「投影」のトリックは、今日、「逆照射」という表現でも、度々問題視されているところです。

(十四)

さて、篠原先生同様、柄谷さんもマルクスに“異議申し立て”を行なっています。しかも、『資本論』の論理、目的に関わる重大な“異議申し立て”です。

『資本論』におけるマルクスの、これまでに述べたような認識（「物神の現象学」としての『資本論』という認識のこと―宮崎）は、後のマルクス主義者には伝わらなかった。しかし、その原因はむしろ、マルクス自身にある。1860年代半ばに『資本論』の草稿を書き終えた時点で、彼は、商品物神が株式資本として君臨するにいたる総過程をとらえようとしていた。したがって、『資本論』は第三巻で、資本がそれ自体商品としてあらわれる株式資本において完結することになっていた。ところが、第一巻を出版する時点で、彼はにわかに現実の状況に立ち戻ったのである（柄谷[2022]303頁）。

そのあたりの事情を、香椎[2023]は次のように追認しています。

マルクスの“方向転換”は、1864年創設のインターナショナルでの革命運動を契機としています。つまり、「『資本論』を新たな『共産主義者宣言』（『共産党宣言』）のようなものに仕立てようとした」（柄谷[2022]303頁―宮崎）と、柄谷さんは考えたわけです。だから、「このことは、『資本論』にあった認識を棄てることに等しい」とまで言い切ります。これはかなり手厳しい（香椎[2023A]24頁）。

他方、マルクスとは逆方向で“方向転換”したエンゲルスについての評価は、実は篠原先生も安堵したところでした。柄谷さんは、「エンゲルス再考」に至る経緯を次のように述べています。

…エンゲルスに関しては、マルクスに先立って「史的唯物論」、つまり、歴史を生産様式から見る観点を確立し、のちに『ユートピアから科学へ』で、科学的社会主義を唱えた人物として見ただけであった。私は、これまでの著作においてもエンゲルスをもそのように見てきた。しかし、『世界史の構造』を出版した後、そのような見方では不十分だと考えるようになったのである（柄谷[2022]355頁）。

エンゲルスの“異変”は、柄谷さんによれば、1850年エンゲルスによって書かれた『ドイツ農民戦争』（それまで痛烈に批判していたトマス・ミュンツァーを社会主義革命運動の先駆者として称賛）とイギリスにおける労働運動の変質（労働組合が保護されるようになった）に注目したところにあります。

史的唯物論の最も重要な柱は、「生産力と生産関係の矛盾」論と、これに並ぶ「階級闘争」論です。生産力と生産関係の矛盾を解決する、重要な役どころが階級闘争なのですから、その階級闘争論にエンゲルスが疑問をもったとすれば、事態は深刻です。私は想像するだけですが、多くの論客が出そろった国際的な革命運動のなかで論陣を張るエンゲルスが、ミュンツァーの宗教的社会主義を認め称賛し、イギリスのチャーチスト運動の行く末に疑問をもった彼の想いが、いかばかりであったか、柄谷さんは至って冷静に語っています。

…エンゲルスは 1842 年にイギリスで産業プロレタリアートの“階級闘争”を目撃したが、49 年には早くもその消滅に出会ったのである。階級意識ないし階級的利害の追求は相変わらず残ったが、階級そのものの揚棄を目指すような“階級闘争”は消えた。それは産業プロレタリアートが敗北したからではない。むしろ、彼らはある程度勝利したのだ。いいかえれば、このとき「社会主義」はある程度勝利したのだが、それとともに消滅したのである（同上、360－361 頁）。

階級闘争のパラドックスです。こうして、資本主義の発展過程、そこでの労働運動・階級闘争の進展が、史的唯物論の命題を、事実をもって消滅させたといえます。

（終）

篠原先生に戻ります。史的唯物論への疑問の上に立った、「未来への展望」についてです。篠原先生が、なぜ「管理の二重性」「商品の二要因」さらには「生産力」にこだわってきたのか、その最奥の理由がここにあります。社会主義とは何か、社会主義の本質に迫る超越論的な問題提起です。一般に、生産手段の国有化だとか、プロレタリアート独裁といったことが喧伝されていた中でのことです。

なにを、どれだけ、いかように生産するかを、利潤追求目的のためにしかおこなえない社会と違って、人々がみずから生産とその管理の体系を直接社会的に決定しなければならない。そうせざるをえないのである。社会主義とはそういう社会である（篠原[1994B]280－281 頁）。

この指摘、実は、社会主義を支え創造する担い手を頭に置いて言われています。社会主義とはどういう社会なのか、と問う場合、仮にそれが自分を外において高みの見物をするというスタンスにあるとすれば、それは望むところではありません。篠原先生の一貫したプロブレマティク、課題に取り組む主体的な姿勢です。人間が主体になる、あるいは“なれる”社会ということを想像してみたいのです。

ですから、人間が社会の主人公になるということは、そうありたいと願った「結果」ではなく、そうしなければならないという「出発点」なのです。かつて、篠原三郎[1980]では、「社会的管理」に焦点を当てながら、すでに「社会主義では、すべての問題は自己がつくりだしたものとして、主体の責任が厳しく問われなければならないのである」（24 頁）、と言っています。その上で、次に「社会的力量」という言葉に注目です。

要するに、人間が社会の主人公になって生産をおこなうということは、…（略—宮崎）…生産力の質を規定していく企業内分業、社会内分業を含めた生産関係全体のあらたなる創造をともなった生産力を展開していくことなのである。…（略—宮崎）…

このように、人間の人間としてその社会的力量が、まさに文字通り、直接に問われる社会が、資本主義止揚後の社会である。その力量によって、自由と民主主義が十二分に開花していくことも可能だろうし、逆に、官僚主義的な管理体制がつくられていくこともありうる。したがって、力量に応じて多様な社会形成の可能性が考えられる。ということは、ある特定の内容をもっている社会が社会主義であると、その実体を先験的に指定してしまうようなことは、政治的にはともあれ、科学的には正しくない（篠原[1994B]281－282 頁）。

社会主義の理念が語られています。「人間が社会の主人公」になる社会についてです。これに対して、理念はともかく、現実的な話、“社会主義の政治制度は？”“社会主義の制度的なプランは？”といった疑問や批判のあることが予想されます。しかし、それは、資本主義社会の、篠原先生の言い方に従えば、自分自身の力が及ばないような「物象化」された社会で、知らず知らず「身に着けて」きた思考習慣ではないでしょうか。「どうする？」ではなく「どうなる？」という思考回路です。

そして、なにより受け止めなければならないのは、人間が自由に生きるということの意味です。自由を求めるからこそ社会主義を希求するということは、「社会主義になれば自由になる」という「どうなる？」論とは真逆の考え方です。真に求められるのは「どうする？」という「創造力」の話であり、私たちの「社会的力量」という主体的な能力と意志の話なのです。

＊付記：史的唯物論批判、つまり社会主義ということについて、篠原先生は柄谷行人とほぼ同じ問題空間で理論活動を行っていたのではないか、と思われてなりません。自由を実現する「社会的力量」の形成という課題です。

史的唯物論でいえば、「未来」は、生産力とともに形成された生産関係（階級）の変革と国家の揚棄によって実現される。そして、それが共産主義だと考えられている。しかし、共産主義は、資本主義経済の破綻によって必然的に生じるものではないし、また、たんに人間の認識と意志によって実現されるものでもない。そこには、人間の意志を越えた何かが働いている（柄谷[2022]382 頁）。

柄谷さんのいう「人間の意志を越えた何か」とは、この点について、香椎[2023B]が検討を加えているので、参照していただきたい。

（みやざき あきら）

【参考文献】

- 柄谷行人【2022】『力と交換様式』岩波書店
香椎五郎[2023A]「交換様式「D」の飛来（前編）—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—」
「市民科学通信」第 31 号
香椎五郎[2023B]「交換様式「D」の飛来（後編）—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—」
「市民科学通信」第 32 号
篠原三郎【1980】「生産・技術・管理の基礎概念」篠原三郎・大田譲編『技術と管理の経営理論』ミネルヴァ書房
篠原三郎【1994A】『現代管理社会論の展望—現代をみる眼—物象化を超えて』こうち書房
篠原三郎【1994B】「生産力論と史的唯物論の限界」『現代管理社会論の展望—現代をみる眼—物象化を超えて』こうち書房
篠原三郎【1994C】「フェニックスとしての商品経済」『現代管理社会論の展望—現代をみる眼—物象化を超えて』こうち書房
宮崎 昭【2022】「篠原三郎と柄谷行人（1）」『市民科学通信』30 号
柄谷行人【2022】『力と交換様式』岩波書店

交換様式「D」の飛来（後編）

—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—

香椎五郎

「D」というのは、いかにも暗号めいています。「霊」という表現にも戸惑いました（香椎[2022A]）。柄谷さんは、ここぞという理論展開の折りに、このような謎めいた言葉、記号を用いています。それはなぜなのか。誰でもが理解し、納得するような表現をなぜしないのか。そこで躓く読者も多いのではないかと思います。

そう感じながら、なおも執拗に柄谷行人[2022B]を繰り返し読むのですが、未だ得心するには至っていません。ただ、「D」にしても「霊」にしても、それを分かりやすい日本語（あるいは欧米の原語を含めて）で表現する術が、いまのところ見あたらない、そして私たちの社会科学では存在しなかった「概念」を、柄谷さんは示そうとしているのではないか、そう思いました。既存言語からの翻訳ではなく、「概念の創造」という課題です。

§

前回（香椎[2022B]）は、アナーキズムとマルクス主義を対照して、「D」の特徴を掴もうとしました。アナーキズムと「D」論との親和性を感じ取ったからです。つまり、前回の繰り返しになるのですが、「アナーキズムの本質は、圧制に対する人間の本能的な憤怒にあり、それは、何よりもまず、人間の道徳的反応なのであって、特定の理論的、イデオロギー的な信条から発し、理性的反省を経由したうえでの行動なのではない。それゆえに、アナーキストの本領は、革命家というよりは、むしろ反逆者である（21 頁）」、という件です。

柄谷さんは、再三再四、マルクス主義が想定するような「特定の理論的、イデオロギー的な信条から発し、理性的反省を経由したうえでの行動」に疑問を呈していました。むしろ、「圧制に対する本能的な憤怒」をまず肯定し、受け容れ、伴走しているように感じたのです。また、「自由と解放への人間的希求」と「固定化し、抑圧的となった社会制度とのあいだの不断の緊張」、つまり「国家」がもつ権力機構に対峙する姿勢を貫いていました。マルクス主義が「国家の揚棄」について“自然消滅”するかのごとく消極的な態度であったのに対して、アナーキズムこそが「国家の揚棄」を積極的に主張したのであれば、なおのこと、「D」とアナーキズムは“親戚関係”にあるように思えます。

“回り道”をします。アンダーソン[2012]は、19 世紀末にいたる、ロシアやヨーロッパでの暗殺事件やテロ行為に注目して、アナーキストなる用語が用いられるようになったのは、バクーニン死去の翌年、インターナショナル年次大会の折りだと言ってます（101 頁）。1910 年、いわゆる「大逆事件」によって幸徳秋水や菅野すがが、そして関東大震災の折には大杉栄や伊藤野枝が殺害されている状況では、権力に対して「テロ行為」も辞さないという気持ち、時代の気分は、分かるような気がします。その上でのことですが、アナーキズムの行動と理念は、アンダーソンによれば、次のようになります。

第一に反動的な権力と資本家に対してあつといわせるようなテロ行為を仕掛けるもとで反動的な権力を恐怖に陥れ、第二に抑圧されている人びとを鼓舞して革命へと再び導くことを意図している（同上、102 頁）。

アナーキズムが、理路整然と革命の展望を描いていたのかどうか、依然として不明です。「抑圧されている人びとを鼓舞して革命へと再び導くことを意図して」いたわけですから、いわゆる「前衛」のような存在は自明の事だったようです。時がくれば、人は立ち上がる、という信念であり、「偉大な領袖」の存在が前提です。これは柄谷さんの納得するところではありません。もとより、「テロ行為」が「D」を呼び込むわけでは、もちろんありません。

松尾[2012]によれば、アナーキストは「アソシエーション」派と呼ばれ、そして、そもそもマルクスの考えと大きな隔たりはなかったと言います。にもかかわらず、ロシア革命以降、大きな隔たりが生じたのだ、と。

政治的場面では、マルクスはアソシエーション派のアナーキスト（無政府主義者）と、あまりにも不要にケンカしすぎたと思います。しかし、ロシア革命でレーニンの権威が鳴り響くより前の時代には、…（略—香椎）…有名なマルクス主義者でアナーキズムと親和的だった人は多かったです。レーニン主義の影響が大きくなって以降、青写真を「合理的」に描いて現実をそれに則らせようという流れと、現場の生身の個々人の都合に合わせた人間関係を求める流れとは、交差することなく現在に至ってしまったと思います（16 頁）。

ここで注目したいのは、アナーキズムが「アソシエーション」派であり、「現場の生身の個々人の都合」というものに配慮するということです。繰り返しますが、「アナーキズムの本質は、圧制に対する人間の本能的な憤怒にあり、それは、何よりもまず、人間の道徳的反応なのであって」、「それゆえに、アナーキストの本領は、革命家というよりは、むしろ反逆者である（香椎[2022B]21 頁）」、ということでした。

有体にいえば、「本能的な憤怒」が大前提にあり、その後のことは「アソシエーション」のなかで解決したらよい、という立場です。そう理解しました。一見して、無責任な言動に感じますが、後で述べるように、これは重大な論点なのです。

ところで、「人間の本能的な憤怒」そして「人間の道徳的反応」を根拠において「革命」を展望できるのはなぜだろうか。どういう理由で、そう言い切れるのだろうか。柄谷「D」論では、この点について特段の言及はないのですが、あくまで前提におかれ、否定されていないように思います。

§

突然ですが、「交換様式 D はまさに、“神”としてあらわれる」（柄谷[2022A]117 頁）と言う主張には驚かされました。香椎[2022B]でも紹介したように、「D」に関わって人間、自然、神の三者が並列して論じられていましたから、「神」一本に断定されると戸惑ってしまいます。柄谷さんは、カントに寄せて次のように言っていました。

カントの考えでは、諸国家の連合（アソシエーション）は、人間がその意志によって作るようなものではないし、また、その意志によって斥けられるようなものではない。それを作る主体は「人間」ではない。といっても、「神」でもない。それは、人間であり、同時に、人間が意識しないような何かである。それをカントは「自然」と呼んだ（柄谷[2022B]287 頁—下線は香椎）。

ここだったのでしょうか、実は柄谷さんご自身も思い悩んだといえます。

こう考えたとき（交換様式 A、B、C、のそれぞれが「霊」的な力によって実現し、D に至っては“神”としてあらわれる、と考えたとき—香椎）私は泥沼状態から脱けたように思う。…（略—香椎）…どうやら、彼らの（ド・マンとデリダのこと—香椎）「霊」がその後、私に憑いてまわったようだ。それが私の仕事をさまたげた。が、おかげで、『力と交換様式』を根本的に書き直すことができたといえる。そこで、私は冗談で、それを「社会化学」と呼んでいる（柄谷[2022A]117 頁）。

また、“回り道”をさせてください。桜井[1997]の「メシアニズム（救世主信仰）」論です。なぜ、フランス、ドイツ、さらにはイギリスではなく、ロシアだったのか。このロシア革命を成功させたのは、「科学的と称したマルクス・レーニン主義（実はレーニン・スターリン主義）の根柢にあった」「神学的な救済の論理」であった、といいます（5-6 頁）。ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』を紹介したあとで、こう述べています。

…近代産業社会の出現のなかで、解体した共同体から寄る^よ辺なき群衆としての大都市に流れ込んだ人々が陥った心理的空虚感、満たされぬ思いこそが、メシア（救世主）への渴望を生んだ。その渴望こそが、20 世紀の新宗教運動としての全体主義（ナチズム、ファシズム、スターリニズムのこと—香椎）を生み出したということなのだ（5 頁）。

であれば、レーニンやスターリンは「神」であり「メシア」であったことになります。独裁、個人崇拜、偶像化はまさしく、「神」が特定の人物に対象化し権力者になることを意味します。フェティシズムに他なりません。では、「交換様式 D はまさに、“神”としてあらわれる」という柄谷さんの主張と、どこが違うのでしょうか。シュヴァイツェル[1957]の言い方では、このように表現されていました。

ゆたかな収穫が神の奇跡の力によって、神秘的に種まきの結果をもたらすように、神の国は人間の倫理的改新にもとづいて、しかも人間のかかわりなしに到来するのである（179 頁）。

仮に、「神の国」を「交換様式 D」に置き換えてみると、それはあくまでも「人間の倫理的改新」に基づいたものでありながら、しかし「人間のかかわりなしに到来する」というのですから、ほぼ同型の論理だと思います。

§

柄谷さんは、「精神としての資本」をテーマに据えて『力と交換様式』の論考を進めていたのですが、この考えを変えることを余儀なくされたといいます。

それまで私は、「精神としての資本」という観点から、資本を見ていた。つまり、マルクスのいう「物神」（フェティシュ）を、ただの比喻ではないとしながらも、比喻として見る視点から抜けきれないでいた。しかし、このとき、それを「精神」というより、むしろ「霊」として見るようになったのである（柄谷[2022A]116 頁）。

ご本人は「冗談」と言っていますが、この「精神」から「霊」への移行を「社会科学」から「社会化学」への転換と考えたのでしょう。およそ、「精神」（あのウェーバー「プロテスタンティズム」を思い起します）ではなく、その上へのしかかり、理性によっては取り扱うことができない「霊」の存在を強調したのだと思います。

前回、「D」に関わる論点を三つ挙げました。第一に、高次元で「回帰」「回復」すること、第二に「普遍宗教」と共にある倫理的で道徳的なものであること、そしてこれが難解なのですが、第三に「何か」として「到来」すること、でした。いずれも、交換を牽引する「力」の特徴であり、それが何であるかは、「交換様式」のそもそもに立ち帰る必要があります。つまり、見知らぬ他者としての共同体との接触であり、社会の形成を誘引する事情です。何度も繰り返しますが、「交換」は「跳躍」であるということでした。

重要なのは、交換が、共同体の内部ではなく、その外にある共同体との間、つまり、見知らぬ、したがって、不気味な他者との接触において始まるということである。だからこそ、そのような交換は、人々のたんなる同意や約束ではない。強制的な“力”を必要としたのである。それがフェティシズムである（柄谷[2022B]22 頁）。

「見知らぬ」「不気味な他者との接触」および「交換」は、人々が共同体のなかで生活してきた圏域を越えて、抜け出すことを意味しています。定住する以前の「遊動性」の共同体では、移動をつうじて生存域を確保していたはずですが、要するに、他の共同体との接触や交換が「社会」というものの形成を物語っています。それは、合理的で目的意識的な行為によって「規則的」におこなわれるものではなく、大きなリスクを伴ったものです。目の前にいるのは「他者」なのですが、そこでの接触以後の営為は、社会という目に見えないけれど、私たちの生存にとって不可欠な、「世界」の形成を意味しています。柄谷さんに援護してもらいます。

「社会的」とは、たんに「関係的」ということではない。むしろ、それは、交換（＝等置）という「行為」に存する、盲目的な跳躍を意味するのだ。「規則」によって、等置という行為の仕方が決定されるのではない。その逆である。等置という行為あったあとで、そのつど規則が見出されるにすぎない（柄谷[1992]62 頁）。

ここで言われている「規則」なのですが、そこには互いの「不承不承」もあって、時には「力づく（戦争）」というルールに従うことも含まれていると思います。いわば、“生存の危機”という強迫的な力が働くのでないか、そう考えると、柄谷さんのいう「原遊動性（U）」の存在が大きな意味をもつことになるのではないのでしょうか。香椎[2022B]の末尾で紹介した（図「力と交換様式」のイメージ）を参照してください。「原遊動性（U）」こそが、交換様式の原点だと思うのです。

§

前回（香椎[2022B]22 頁）の「サーフィン」から一部を再掲します。



【<セクション1>では、

1. 遊動バンドが定住したあと…彼らは未曾有の危機に出会った…攻撃欲動として奔出した…それを抑えて他者への譲渡＝贈与を迫る「反復強迫」があらわれた。そして、それは「霊」の命令として出現（柄谷[2022B]94 頁）、
2. 首長制社会は…交換様式 A、そしてそこから生じる力によって支えられている。この「力」は、定住化によって抑えられた原遊動性（U）の強迫的な回帰にもとづくものだ（同上 123 頁）、

<セクション2>では、

1. 神観念の変化をもたらすのは、支配的な交換様式の変容である…呪術から普遍宗教

にいたる変容（同上 152 頁）、

2. 世界宗教が交換様式 B と C の圧倒的優越によってもたらされる…普遍宗教はそれらに対抗するものとして、交換様式 D によってもたらされる。そして、D とは、B と C によって封じ込められた A の“高次元での回復”にほかならない（同上 158 頁）、
3. 遊牧民は原遊動民とは異なるが、後者にあった重要な側面、…自由独立性と平等性を保持した…遊牧民は“原遊動性”の記憶を保持した…（同上 161 頁）、
4. イエス…彼にとって、隣人とは、社会的諸関係を越えて見出されるような他者である。…交換様式 A・B・C を越えて人と交わる こと…それが D の到来であり、「神の国」の到来である（同上 177-178 頁）、
5. D の出現は、一度だけでなく、幾度もくりかえされる…普遍宗教の始祖に帰れというかたちをとる。…千年王国やさまざまな異端の運動がそうである（同上 187 頁）、
6. エデンの園への回帰は、あの世においてではなく、この世における A・B・C からの脱却なのだ。そして D は人間の願望や意志によってもたらされるものではなく、それらを超えた何かとして到来する（同上 208-209 頁）】☞

柄谷さんがいう「原遊動性（U）」とは、たとえばですが、定住した狩猟漁労採集民であったアイヌや縄文人について、彼らが定住する以前について考える際に、当然、実証ではなく「抽象力」によって、いわば思考実験によって得られたものであることの留保がついた上での話です（柄谷[2014]179-180 頁）。上記＜セクション 2 の 3＞に注目します。「遊牧民は原遊動民とは異なるが、後者にあった重要な側面、すなはち自由独立性と平等性を保持」しており、「つまり、遊牧民は“原遊動性”の記憶を保持」していた、との指摘（柄谷[2022B]161 頁）に注目したのです。さらに、＜セクション 1 の 2＞についてです。

交換様式の観点からいえば、首長制社会は、交換様式 A、そして、そこから生じる力によって支えられている。この“力”は、定住化によって抑えられた原遊動性（U）の強迫的な回帰にもとづくものだ。そのため、A を通して、原遊動性がある程度保持される。具体的にいえば、氏族社会・部族社会の人々は集団を形成しその中での規律に従いながらも、平等性と独立性（自由）を維持している（同上、123 頁）。

見られるように、交換様式 A は、そもそもが「原遊動性（U）の強迫的な回帰」でした。しかも、＜セクション 2 の 2＞で述べられているように、「D とは、B と C によって封じ込められた A の“高次元での回復”」とあります。さらに、「サーフィン」では漏れていた重要な指摘のあることを付け加えさせてください。

社会構成体は、A、B、C の交換様式の結合体としてあり、どれがドミナントであるかによって、歴史的段階が区別される。そして、D は、C が支配的となる資本主義社会のあとで出現するような社会の原理だといってよい。しかし、それはたんに生産力が進んだ段階で出現するというようなものではない。D はいわば、B と C が発展を遂げた後、その下で無力化した A が“高次元”で回帰したものだ。注目すべきなのは、それがすでに古代において出現したということである（同上、159 頁）。

「D」の飛来は、原遊動性（U）が A となって回帰し、さらにその A が D となって回帰するという二段重ねの論理になっています。しかも、その回帰は“高次元”という但し書きがついています。この「自由・独立・平等」のさらなる“高次元”とはなにを意味しているのか、疑問が残ります。また「資本主義社会のあとで出現する」とありながら、「古代において出現した」というのも、俄かには判断できかねます。どのように考えたらよいのでしょうか。

視点を変えてみます。

交換様式 D とは、A（互酬＝贈与と返礼）、B（服従と保護＝略取と再分配）、C（商品交換＝貨幣と商品）と並び立ち、だけでなく、これらを超える交換様式なのですから、何と何との交換であるかが示されなければなりません。「D」は A の高次元の回復と言うのであれば、しかも人間社会の歴史をなんらかの「交換」の歴史と考えるのなら、高次元のレベルにある「互酬」交換様式ということになります。

ここから先は私の推測です。

あえて言うとするれば、クロボトキンではありませんが、「相互扶助」の交換様式であり、カント流に言えば「目的」の交換様式とでも言えるでしょうか。交換当事者が、互いに「遊動性原理（U）」にある「自由・独立、平等」を交換し合うということは、極めて「倫理的」で「道徳的」なアソシエーションの世界です。

そこで、唐突な感じを受けるかもしれませんが、宮崎[2023]が指摘している論点について紹介し、この稿をとりあえず閉めることにします。「人間が社会の主人公になる」社会主義での、私たちの「社会的力量」という論点、視角、プロブレマティックです。ともすれば、社会主義を論じる際には、その制度や法令の善し悪しに注目しがちです。しかし、よく考えてみれば、その社会を形成し、支え、維持していくために決定的に必要なのは、“人的資源”以外にありません。

“アソシエーション”というのは、私たち自身の力量形成の問題です。誰か指導者がいて、それに“従う”ということではありません。篠原三郎さんは、すでに 30 年ほど前に、次のように述べています。

このように、人間の人間としてその社会的力量が、まさに文字通り、直接に問われる社会が、資本主義止揚後の社会である。その力量によって、自由と民主主義が十二分に開花していくことも可能だろうし、逆に、官僚主義的な管理体制がつくられていくこともありうる。したがって、力量に応じて多様な社会形成の可能性が考えられる。ということは、ある特定の内容をもっている社会が社会主義であると、その実体を先験的に指定してしまうようなことは、政治的にはともあれ、科学的には正しくない（篠原[1994]282 頁）。

社会の危機、世界の危機、たとえば世界戦争だったり世界恐慌、あるいは地球環境の危機など、いまから予想される「人命の危機」にかかわる事件（事故）が、今までがそうであったように、今後もそう遠くない時期に起こることが危惧されています。カントのいう「自然の狡知」（自然の「いたづら」）が、その時、国際的な「相互扶助」を命ずる「神」の声、つまり人間自らが企図したわけではなく、あたかも「自然」の力であるかのごとく、その「声」（D）は現れてくるということでしょうか。これ以上放っておくと、私たちの「独立・自由・平等」が侵蝕されるだけでなく、社会の存続・維持さえも不可能になるという状況です。

しかし、ここからがポイントです。つまり、篠原さんが特に留意した「社会的力量」の形成、蓄積はいかにして実現するのだろうか。どんな「社会的危機」や「世界的危機」が生じようと、私たち自身の「社会的力量」が不十分であれば、また交換様式 A、B、C に「回帰」することになります。「社会的力量」の課題は、社会主義に「なってから」の問題ではなく、いま、この時点での課題です。日々の経済活動や政治活動だけでなく、市民活動や社会活動のなかでも問われてくるものです。篠原さんは、そこをとても大事に考えていました。その意味で、「D」の飛来が示しているのは、実はどこからか“飛来”してくるのではなく、私たち自身のなかから、思いがけず「相互扶助」の「命令」あるいは「自由」の「命令」となって「飛来」してくるものでし

た。

とても重要な問題なので、改めて「D」論に挑戦します。

(かしい ごろう)

【参考文献】

香椎五郎[2022A]「ぶらり、『霊』の旅—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—」『市民科学通信』第30(11月)号

香椎五郎[2022B]「交換様式『D』の飛来(前編)—柄谷行人『力と交換様式』をめぐって—」『市民科学通信』第31(12月)号

柄谷行人[1992]『探求Ⅰ』講談社学術文庫

柄谷行人[2014]『遊動論 柳田国男と山人』文春文庫

柄谷行人[2022A]「社会科学から社会化学へ」『群像』7月号

柄谷行人[2022B]『力と交換様式』岩波書店

桜井哲夫[1997]『社会主義の終焉 マルクス主義と現代』講談社学術文庫

篠原三郎[1994]『現代管理社会論の展望—現代をみる眼—物象化を超えて』こうち書房

松尾 匡[2012]『新しい左翼入門 相克の運動史は超えられるのか』講談社現代新書

宮崎 昭[2023]「篠原三郎と柄谷行人(3—終)—史的唯物論への疑問と未来への展望」『市民科学通信』第32(1月)号

アンダーソン、ベネディクト[2012]『三つの旗のもとに アナーキズムと反植民地的創造力』NTT出版

シュヴァイツェル,アルベルト[1957]『イエスの生涯—メシアと受難の秘密—』岩波文庫



【近況短信】ファンタジーにある「古い」 —団地タクシー奮闘記（「呪文の人」の巻）④—

宮崎 昭

この「団地タクシー」を運転しているのは今年 75 歳になるキャリア 5 年の老人です。

このタクシーを利用している人たちも老人です。いわば、ローロー(老老) 相互扶助の物語です。

前回紹介した、「朝日歌壇」に掲載された短歌を、もう一度ここに取り上げます。

「乗るものも乗られるものも高齢者 団地タクシー三輪車ゆく」

「乗られるものも高齢者」、私の筋肉・関節も、段々つらくなって来ています。

私事ですが、若いころから「耳鳴り」に悩まされてきました、その上に 60 歳代から難聴に侵されています。よく聞こえないので、繰り返し、聞き直すのですが、そこに「申し訳ない」という気持ちが湧きあがります。「ちゃんと聴いていなくてゴメンナサイ」、「二重手間をとらせて申し訳ありません」、ともっばらこちらに「非」があることが前提です。すでに、「健常者」と「障害者」の非対称の形成です。「障がい」のある者が、そうでない人びとに「申し訳ない」という感情を抱く瞬間です。

最近、身をもって、そのことを痛感します。心のなかで、「理不尽だ！不条理だ！」と叫んでいますが、寄る辺なき心細さに「改善」の見通しはありません。

「団地タクシー、お願いします」というお迎え依頼の電話がきます。かなり耳の遠い老婦人ですから、この電話もほとんど一方通行です。“言いつぱなし” “依頼しつぱなし” です。でも、いつも微笑みを絶やさない、「優しいおばあちゃん」です。平地だと、フツーに歩くことができるのですが、そして中心街までバスに乗って買い物をしたりするのですが、団地内の上り、下りの勾配には自信がないようです。

こちらの「おばあちゃん」はすでに、私たち運転手の間では超有名人です。M さんからの依頼電話があったということだけで、ある種の緊張感が走ります。「走ります」というか、“身震いします”。

電話があつてすぐに、M さんのご自宅まで向かいます。通常でしたら、電話して依頼してきたのですから、最寄りの場所で待機しているはずですが、それが「普通」です。ほとんどがそうです。「よう来たね」「ありがとさん」という態度で迎えてくれるのが「普通」です。ただ、男性の場合は、「押し黙って」「苦虫をかみ潰した」ような表情でいる方が多いですね。何故なんでしょう？「男は黙って〇〇ビール」なのでしょうか。その男性が昭和を生きてきた「履歴」のようなものが態度や表情に現れているのかもしれませんが。

これを「普通」と言っているのかどうか、「普通」の意味が壊れそうです。

ともかく、ここでは「普通」と「通例」を私の独断で、区別して用います。「通例」の意味はこうなんです。「M さんの「通例」はベッドの中です。そう、ベッドのなかなのです。お迎えに行っても、姿がありません。お部屋まで行って、「ピンポン」慣らします。でも、応答がありま

せん。

ドアは開いています。いつもです。何度か「ピンポン」した後に、ドアノブをまわし、玄関口で呼び掛けます。でも、反応がありません。耳が遠いのですから、仕方ないのかと思いきや、一歩玄関口に入るとベッドのなかに横たわっている M さんの姿が見えます。ただ横たわっているだけでなく、何か、呪文のようなものを大きな声で唱えているのです。初めてこの光景を見たときは、「見てはいけないものを見た」という心境でした（いまの私は、「そうですね、そうでしたか、頑張っているのですね」という余裕ができています）。

呪文のようなものを唱え、すでに心は別の世界に移っていると思われる M さんですから、ここは彼女の修練を尊重して引き下がる道があります。しかし、すでに予備知識があったので、私は部屋に入りこみ、枕元で呼び掛け、どうしても「修練」の道から解脱しないので、思いっきり枕を揺らして「覚醒」するようにします。その際の表情がなんとも可愛らしいのです。バッチリ「覚醒」するのですが、その佇まいがとてもチャーミングなので魅了されます。

「え！」、

「まー！まー！まー！」

「いますぐ準備します」

急いで身支度して、ものの3分ほどでタクシーに乗り込みます。それまで、すでに20分以上経過しています。次に乗車を希望している人からすると、なんとも厄介な迷惑住民です。

でも、それが M さんの「通例」なのです。彼女がベッドに横たわりながら、何を唱えていたのかは、全くわかりません。もしかしたら、亡くなった夫、あるいは我が子の霊を鎮めるための経文だったのかもしれませんが、私にはそうは聞こえませんでした。昭和歌謡を歌っていたのかもしれませんが。それぞれの人生で、それぞれの重荷を背負い、ようやく切り開いてきた「今」の生活があるのでしょう。

M さんは、「普通」の乗客ではありませんが、彼女自身は「通例」の振る舞いをしているだけです。「普通」でない「通例」の行為は、冒頭に述べたように「非対称」の「申し訳ない」態度でしょう。とにかく怪訝な目で見られますし、「変人」扱いもされます。しかし、他人が見てどうのこうのというレベルの話にしてしまうのは、とても惜しいと思うのです。M さんが、ベッドのなかで呪文のような「何か」を唱えていることに、格別の意味があるように感じるからです。一生懸命生きているのです。何かを訴えているのです。

そんなこんなで数日後、「タクシー運転手のみなさんへ」ということで感謝の気持ちを込めて、都内有名店の焼き菓子がプレゼントされました。もちろん、大事に、おいしくいただいたことは言うまでもありません。

＊「団地タクシー」は、八王子市内の UR 大型団地内でボランティアによる運行を行っている三輪自転車です。

つづく

(みやざき あきら)

「見えざる手」から「見える手」へ

竹内 真澄

A・D.チャンドラー Jr.という高名な学者がいる。『経営者の時代』1977を書いた。それはアメリカにおける多国籍企業の成立、発展史である。チャンドラーは、市場的調整と管理的調整を分け、家族企業が支配的であった時代は、1840年代から第一次大戦までで終わり、その後市場的調整はますます近代企業に内部化され、管理的調整が有効に作用するようになるという。これを「見えざる手」から「見える手」への移行という。

大企業は、ますます多国籍企業になる傾向がある。ゆえに、多国籍企業は、世界市場の「見えざる手」をますます「見える手」に取って換える。私たちは、しばしば世界市場は想像を超えるほど巨大であり、誰にも見通すことはできないと考えがちである。F・ハイエクなどは典型であるが、市場を見通すことは全知全能でありえぬ人間にはできないと考える。市場は、設計不能な作用をするひとつのメカニズムであり、無知を前提にして、それはかえってよく機能すると考える。

しかし、社会科学において重要なのは、抽象力以前の表象である。誰であれ、現実を表象してから分析的に抽象するのだから、おおものの表象がゆがむと、抽象＝分析もおかしなことになる。現代の世界市場とは、いったいどういうふうに変動しているのだろうか。

表象を鍛えるうえで、ハイエクとチャンドラーをぶつけてみるのは意味のないことではない。私の理解では、ハイエクはあまりにもA・スミスに戻りすぎている。彼の論理は、きわめて明晰であるが、思想は18世紀末で止まっている。したがって、「見えざる手」に全幅の信頼を寄せてしまう。ソ連もファシズムも福祉国家も、何の必然性もない、ただの逸脱でしかない。

これにたいして、チャンドラーは、すぐれた歴史的感覚をもち、20世紀初頭のバーナム以降の経営者革命論やバーリー、ミーンズの「所有と経営の分離」論の系譜にたっている。雇われ経営者層が機能資本として会社を支配するだけでなく、「生産と流通」を調整するようになる、と主張する。チャンドラーから見れば、ハイエクは、市場のことは語るが、近代企業のことを何も知らず、まるで家族企業が永久に存続するかのように思い込んでいる。

重要なことは、歴史と論理の両方に精通することである。世界市場と大工業という枠組みで資本の発展を考えたのは、マルクスであった。市場の権威と企業の権威は相互に依存していると同時に対立しあっている（『哲学の貧困』）。社会が一つの工場になってしまうという呪いを個別的資本家はかけられているのだとも言った（『資本論』）。

これを言い換えるならば、市場は発展すればするほど、その胎内から企業を生み出さざるを得ない。そうなれば、「見えざる手」はますます「見える手」によって置き換えられていくほかはない。とはいえ「見えざる手」が「見える手」によって自動的に排除されるわけではない。ただ「見える手」がドミナントになるだけである。それでもひとたび「見える手」が支配的になれば、一体誰がその「見える手」を握るのかということが世界史の法廷に上程される。

(たけうち ますみ)

【エッセイ】女子長距離走者の夢

照井 日出喜

吹雪の京都。2023年1月24日は、珍しく「大雪」である（もっとも、豪雪地帯の、ほとんど1週間もの間、間断なく襲いかかる雪の大軍に比べれば、およそかわいいものではあるが）。

吹雪の京都で思い起こすのは、雪の中で行われた、2017年1月15日の全国女子駅伝（都道府県対抗女子駅伝）である。

その日、わたしは京都で駅伝が行われていることなど夢にも思わぬまま、旧造形大での演劇公演を観るために、白川通をバスで運ばれていた。時折り、雪がかなりの強さで吹き付ける、京都では珍しい空模様であったが、バス停で降り、大学に向かって通りを横切ろうとしたところ、警備の警官らしき人に呼び止められ、「この横断は、まもなく女子駅伝のランナーがやってくるために禁止されています」と言う。しかし、ランナーたちの姿はまったく見えないため、「まだ時間があるでしょう？」と問うと、「規則で決められていますから」ということで、すぐ目の前の大学に行くことは許されないと言う。「ランナーたちが通り過ぎるまで、どのくらいかかるんですか？」と訊くと、「まあ、15分ぐらいでしょう」。演劇の開演までにはまだ時間はあったのだが、ともあれわたしは「いやいやながら」沿道の応援団の一員にされてしまったのである。

やがてランナーたちが近づいて来たのだが、すでに何キロか走っているにもかかわらず、ほとんど平然とした表情で駆け抜ける選手たちもいる一方、疲労困憊し、顔を歪めて苦しそうに息を吐いて走るランナーもいて、わたしは、「この違いはどこから来るのだろう」などと、いかにも呑気なことを考えていたのだが、突然、「〇〇ちゃん！ あと少しだよ！ あと少しだよ！ いけるよ、いけるよ！ がんばって！！」という、ほとんど悲鳴のような声が周囲を圧して響き渡った。

いまにして思えば、ここは全9区のレースのなかの6区〔4.0875km〕の後半にあたる所で、この駅伝は、3区と8区は中学生区間で、他に3名以上の高校生を起用しなければならぬことが定められており、スタートの1区とアンカーの9区は、各チームの主力（だいたいが実業団か大学のアスリートたち）が投入されるのが通例であるから、国際会館前で折り返した後の6区や7区〔4.0km〕には、基本的に高校生ランナーが配置されており（たとえば、のちに名城大学のエースとなり、2023年4月から三井住友海上に所属する小林成美さんは、この時はこの6区に長野東高校から出走している）、したがって、この声援は、高校でずっと苦（楽）を共にしてきたチームメイトによるものだったのかも知れない。

いずれにしても、それまでぼんやりと立っているだけだったわたしは、この声によって少し心を入れ替え、ランナーがやってくるたびに拍手を送ることになったのである。

この日の天候は最悪で、YouTubeで見ると、跨線橋のような、およそ風を遮るもののない所では、吹雪で前の走者がまったく見えないくらいの状態であり、解説者も言っていたように、ウォーミングアップが十分に取れぬまま走らざるを得ない場合もあったのではないと思われる。北海道や東北のランナーでもない限り、風雪が吹きすさぶなかを走るなどという経験はないであろうから、走者たちにとっては、ほんとうに苛酷なレースだったことであろう（ちなみに、この日の最終リザルトは、アンカーの京都の筒井さん〔ヤマダ電機〕が岡山の小原さん〔天満屋〕の猛追を振り切って辛くも逃げ切り、京都に優勝をもたらしている）。

上述のように、2017年の1月に、一瞬、心を入れ替えたものの、しかしそれはまさしくその一瞬だけのことで、そのあとも女子の長距離走には関心がないままであったのだが、翌年から、わたしの「歪んだ郷土愛」 (!) のゆえに、少しずつこの競技を追うこととなった——それというのも、大東文化大1年の鈴木優花さんが、さまざまなレースで、前を行く走者を次々にゴボウ抜きする快走を演じ、瞬く間に大学長距離走のヒロインとなったのであるが、彼女の出身校は秋田県の大曲高校で、大曲市（現大仙市）には、かつてわたしが通っていた大曲中学校があったからである。大曲高校は、仙台育英や薫英女学院、長野東や立命館宇治のような高校とは異なり、長距離走ではまったく無名な存在であり、そこから突如として大学の長距離走界を「席捲」するがごとき選手が出現すること自体、ほとんど不思議とも言える現象であった。

彼女の戦績を追うことは、しかしまた、たんに大学の長距離走のみならず、実業団のそれを含めた全体的な長距離走の状況を追うことでもある——実業団チームが日本一を競う11月下旬の「クイーンズ駅伝」や、その予選会である10月下旬の「プリンセス駅伝」は、もとより大学生の関わるところではないが、しかし、春から繰り返し行われる、大学や企業が主催する記録会や、日本選手権、国体、マラソン等々には、当然のこととして、実業団と大学のランナーの双方が覇を競って参加するからである。

間違いなくすべてのスポーツにおいてそうであろうが、長距離走に賭けるアスリートにとっての不倶戴天にして最大の敵は、怪我である。わたしの知る限り、怪我とそれによる体調不良に長期にわたって苦しむことなくキャリアを全うする一流のランナーは、ほとんど皆無であり——たとえばワコールの安藤友香さんなどは、あるいは例外をなすのかも知れないのだが（もっとも、ただたんに、彼女の体調については一般に公表されていないだけのことなのかも知れない）——、ともかく疲労骨折と貧血は、彼らのいわば職業病であり、しかもそれを克服して再起するには、数カ月、もしくは気の遠くなるような数年を要することも稀ではない。日本郵政の鈴木亜由子さんにせよ、天満屋の前田穂南さんにせよ、2021年の東京オリンピックのマラソンは、明らかに万全にはほど遠い状態での出場であり、鈴木さんの場合には、もしオリンピックが予定通り2020年に開かれていたならば、おそらくは欠場という決断をせざるを得なかったのではないと思われるほど、この年は不調であった。日本郵政から積水化学に移籍した鍋島莉奈さんにしても、数年前から断続的に治療に専念する状態が続いていて、今年のクイーンズ駅伝でようやく復活を遂げたばかりであり（このレースの5区〔10km〕で、前年までチームメイトだった鈴木〔亜〕さんと熾烈なデッドヒートを演ずることになる）、パナソニックの渡邊菜々美さんは復活を遂げたものの、同じチームの堀優花さんは、その実績は輝かしいものでありながら、近年、トラックでもロードでも、ほとんどその姿を見ることはない。さらには、一昨年、文字通り彗星の如く登場し、大学1年ながら、トラックでさまざまな記録を打ち立てるとともに、5年前の鈴木優花さん同様、ロードでは出場するたびに前の走者のゴボウ抜きを演じて、まさしくジャーナリズムの寵児となっていた不破聖衣来〔せいら〕さんも、今年は少なからぬレースでの欠場が続き、残念ながら、彼女もまた、アスリートの体調の回復には長い時間を要するものであることを示している。

それぞれのチームの主力で、かつ、日本の陸上界の代表的ランナーでもあるような、上述のアスリートたちについてはさまざまな報道が行われるものの、一般的には、アスリートたちにとって「万全のコンディション」というものはかなりの程度まで僥倖に属するものであるように見える。体調が持続的に整い、年間のさまざまなレースを消化しながら、特定の舞台に向かってピークを持って行くことは、もちろん、理想であるが、じっさいには、好不調の波を引きずりながらトレーニングを積みつつ、ちょうどコンディションが「好調」の時に目ざすレースの日程が合うことになれば、自己新記録を連発して実績が上向きになり、大記録を打ち出したり、国際的な大会で勝利することができる、ということの方が、実態に近いのではないと思われる。

大学の場合には、「たかが部活」であるが、「されど部活」であり、彼らがどの程度まで学業に取り組むものなのか、わたしには知る由もないが、実業団の場合には、おおよそ、朝練→朝食→業務→昼食→休憩→本練→夕食→筋トレ等、という日課をこなすのが一般的ということであり、本練では、たとえば10000mを2本のあと、スピード練習として400mを全力疾走で2〜3本こなす、という具合で、だいたい月間1000km前後を走破すると言われている（かつてシドニー・オリンピックのマラソンで金メダルを獲得した高橋尚子さんや、その次のアテネの勝利者であった野口みずきさんの場合には、月間1400kmを走るのが課題だったとのことである）。逆に言えば、たとえば疲労骨折をした場合、常人ならばとても耐えることができないと思われる、こうしたハードな練習へとふたたび帰還するまでに、数カ月もしくは数年を要することになるのは不可避であり、その場合には、肉体的な問題とともに、精神的な重圧、つまりは、アスリートとしての不安や、この状態では引退すべきではないのか、という逡巡に耐える日々を過ごさなければならぬことになる。

太田琴菜さんは、日本郵政に所属するアスリートであるが、わたしはこのランナーを日本郵政チームのHPのなかで知るのみで、長い間、一度も公式のレースでその姿を見ることはなかった。彼女はかつては立命館大学のエース格の選手であり、2018年に郵政に就職したのであるが、ほぼ3年間、ひたすら治療に専念する日々を過ごさざるを得なかったという。そうした日々が可能だったのは、郵政が彼女の復活に期待し続けたがゆえだったのであろうが、じっさい、例年、さまざまな実業団チームのHPで、「怪我のため満足に走ることはできない日々で、皆様にはほんとうにご迷惑をおかけしました」「2年の短い間、思うように走るができず、悔しい日々でしたが、チームの皆様にはつねに励まされ続けました」というようなメッセージを残して退部・引退していくランナーは少なくはなく、そしておそらく、そうした挨拶を公けに行う機会もないまま、期待されつつもひっそりと消えていくアスリートはさらに多いことであろう。太田さんは、左腕を少し掻い込んだ形に折り、右腕は逆にかなり延ばしたままりズムを取るという、左右非対称なスタイルで、両肩を少々振ったように動かしながら、首を左右に振って走るという、じつに個性的なフォームを持ち、集団のなかにもすぐに彼女の存在がわかるほどである。たしかに現在は、クイーンズ駅伝、全国女子駅伝、名古屋ウィメンズマラソンなどで活躍し、パリ・オリンピックのマラソンの日本代表選手の選考大会であるMGC（マラソングランドチャンピオンシップ）への参加資格を持つにいたっているのであるが、しかし、わたしなどは、あたかも前へ進む推進力の根源のごとくに、正確無比に刻む右腕のリズミカルな動きを見ながら、走ることはできなかった時間はおそらくは永遠の如くに感じられたであろうこと、そしてそれがどれだけの苦悩と逡巡を伴うものであったかということについて、時折り、思いを巡らすことになる。

体調を崩すのは、もとよりトレーニングの時に自覚するのみではない。トラックやロードのレースのさなかに変調を来し、ずるずる順位を下げることも、それほど稀なことではない。

木村友香さんは、現在は資生堂に属し、以前から国際級の成績を収めるランナーであるが、2020年のプリンセス駅伝で5区（10.4km）を走ったさい、後半、明らかにどこかに故障が起き、区間順位は19位となり、全体順位も2位から6位へと下降する。そのほぼ1カ月後、彼女はクイーンズ駅伝でアンカーに配置されたのであるが、おそらくはまたしても故障が発生し、区間順位は20位、チームの全体順位も7位から12位へと急降下し、資生堂は、8位までに与えられる、翌年の大会へのシード権（通称「クイーンズ8〔エイト〕」）を失うことになる。脚が思うように動かぬなか、ずるずると追い抜かれる苦しい状況に、木村さんは、悔しさと情けなさに表情を歪め、そしてまたおそらくは、せっかく「クイーンズ8」の枠内で襷を運んで来てくれたチームメイトへの申し訳なさに苛まれつつ、ゴールすることになる。

しかし、翌2021年の「プリンセス」では、彼女は1区を担当し、第一生命の小海遥さんに執拗に食い下がられながらも、最後は突き放して区間賞を獲得し、翌月の「クイーンズ」では、順位としては敗れたものの、1位と同タイムで1区を通過するのであり、2022年の「クイーンズ」で

は、同じく1区、スタート直後から大方の意表を衝いて大逃げを打って先行し、2位以下に大差を付けて2区に繋ぎ、資生堂の優勝に貢献する。彼女の「リベンジ」は、まさしくみずからの不甲斐なさに対するリベンジであったに違いない。

2022年10月23日は、大東大から第一生命に就職して1年目の鈴木優花さんが、5区(10.4km)にエントリーした「プリンセス」の日であった。3区(10.7km)、前述の小海さんの、今回は長丁場の区間での華やかな快走で首位に立った第一生命は、4区でも1位を維持し、鈴木さんに襷が渡された。おそらく、わたしのみならず、多くの人びとは、これで彼女は後続をさらに2分ほども引き離し、優勝を確実なものにして、アンカーである、大東大の先輩にあたる関谷さんに襷を繋ぐだろうと思ったことであつたろう——しかし、あと3kmぐらいの所から、明らかに彼女には異変が生じ、彼女は頻繁に時計を見ながら表情に焦りの色を浮かべて走るようになり、多分、あと1kmぐらいの所で、後ろから来た九電工の逸木さんにあっさり抜かれて2位となる。わたしなどは、ロードでは「ゴボウ抜き」の優花の異名を持つ彼女が、追い抜くのではなく追い抜かれる、という事態を目の当たりにして、それこそには信じ難い思いであつた。

しかし、わたしにとってさらに衝撃だったのは、エントリーはしていたにも関わらず、「クイーンズ」(11月27日)の前日の午後、オーダー表が発表されたさいに、彼女の名前が第一生命のメンバーには入っていなかったことである。わたしは大いなる失意のもとで関心を失い、「これで興味は、資生堂と積水化学のどちらが勝つかだけになった」と思ったことであつた。

実業団が女子長距離走チームを擁する場合、正確なことはわたしには知る由もないが、年間、少なくとも数億円の予算が必要であらうと想定されている。駅伝の最終的なチームは6名からなるが、だいたいチームは、少なくとも10名程度の選手を擁しており、さらにスタッフとして、監督、複数のコーチ、トレーナー、マネージャー、管理栄養士、場合によってはアドバイザーといったポストが一般的であり、それに加えて、寮費、グラウンド等があればその整備費、筋トレのための用具や設備、遠征費、時として海外で行われる合宿の費用、頻繁に履き潰されるであろうシューズの費用、さらには、中学から高校・大学と、国内で開催される多くの競技会の見学に、近未来のリクルートのために飛び回るスタッフのための費用も加算されるであらう。

もちろん、実業団チームは、ある程度まで企業の広告塔という性格も持っている。たとえば昨年の「クイーンズ」では、スタートからゴールまで、木村一佐藤一山一ジェフ・ティチー五島一高島のラインで、資生堂はほぼトップを占め続け、ピンクとグレーのユニフォームを身に着けた走者たちがひたすら前方を見つめてストイックに走り、中継点ではお互いに笑顔で襷渡しを行い、やがて、アンカーがチームメイトやスタッフの歓喜の輪のなかに飛び込む、という「ドラマ」を、資生堂という名前を2時間半にわたって連呼しながら、テレビが全国放送で流すのであるから、それが企業のイメージにとってネガティブであらうはずはない(ただし、正月の箱根駅伝などに比べれば、「クイーンズ」はまだマイナーなものにとどまっている言われるのだが)。

他方、アスリートの「本能」は、要するに、相手が誰であらうと勝つことである。トラックでスタートラインに立てば、あるいは、ロードで中継点のラインに立てば、絶対的威力を持って君臨する本能は、ただひたすら勝つことのみを命ずるのであり、なにがしかの駆け引き(ある意味ではささやかな「権謀術数」)を駆使しつつ、ランナーはその命令に確然として服従することになる。そしてまた、当然のことながら、現在得た勝利のはるか先に見え隠れするさらなる勝利の場所は「世界」であり、凄まじい精神的重圧と苦しいトレーニングに耐え、世界の頂点へと昇りつめることが、脳裏に焼き付いて離れぬ夢なのであり、つまりは、鈴木優花さんが第一生命のHPに書くように、「世界大会でメダルを取る」こそが、その夢の内実をなすのである。

パリ五輪のマラソンの代表選手を選考するMGCは、今秋10月15日に開催される。鈴木さんは、すでに大学卒業直前の名古屋ウィメンズマラソンで、それへの出場資格を得ている。

(てるい ひでき)